HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	集落内の言語差 : 下北半島上田屋
Author(s)	井上, 史雄
Citation	北海道大学人文科学論集, 12, 65-101
Issue Date	1975-01-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34315
Type	departmental bulletin paper
File Information	12_PL65-101.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

集落内の言語差

—— 下北半島上田屋 ——

井　上　史　雄

1．はじめに

一共同体内の成員が同じ（またはほぼ似た）言語を有しているとは，言語理論の重要な前提であった。しかし言語地理学が明らかにした如く，かなり狭い地域の中にも地理的な言語差が認められ，また社会言語学が明らかにした如く，一共同体内にも社会層・社会条件などによる差がある。比較的等質的かつ固定的と見られる農村社会の一集落の中での言語差は，それではどうであろうか。

言語地理学の可能性についての現時点での展望は「国語学」101集に述べる機会があったが，具体的資料は多く掲げることができなかった。この論文では一集落内の言語差の実態について下北半島の一事例を検討したい。

2．調査の概要

1963・64年（昭和38・39年）に，九学会連合下北調査の一環として，下北半島全集落の老若二世代についての言語地理学的調査が行なわれた[1]。老若二世代の地図を比較することによって地理的分布による語史の再構の当否を，検証することができたが，更にかなり大きい一集落での全員調査によって確認しようと目したものである。

第一年度の調査結果により，下北半島を東西に分ける分布パターンが多くの項目において現われた[2]。その境界付近に当る上田屋（カミタヤ）を取り上げ，調査項目はこの付近に等語線の走っている言語現象を選んだ。調査は1964年７月31日から８月３日にかけ，柴田武・加藤正信・加藤貞子・川本栄一郎・井上史雄が行なった。

この集落の位置は付図に示してある（なお以下の分布図でも矢印で示す。）下北半島の中心田名部（タナブ）町（現むつ市）の東南約６kmに位置し，田名部からバスで約20分である。当時は泊（トマリ）行きのバスが日に３往復通っていた。

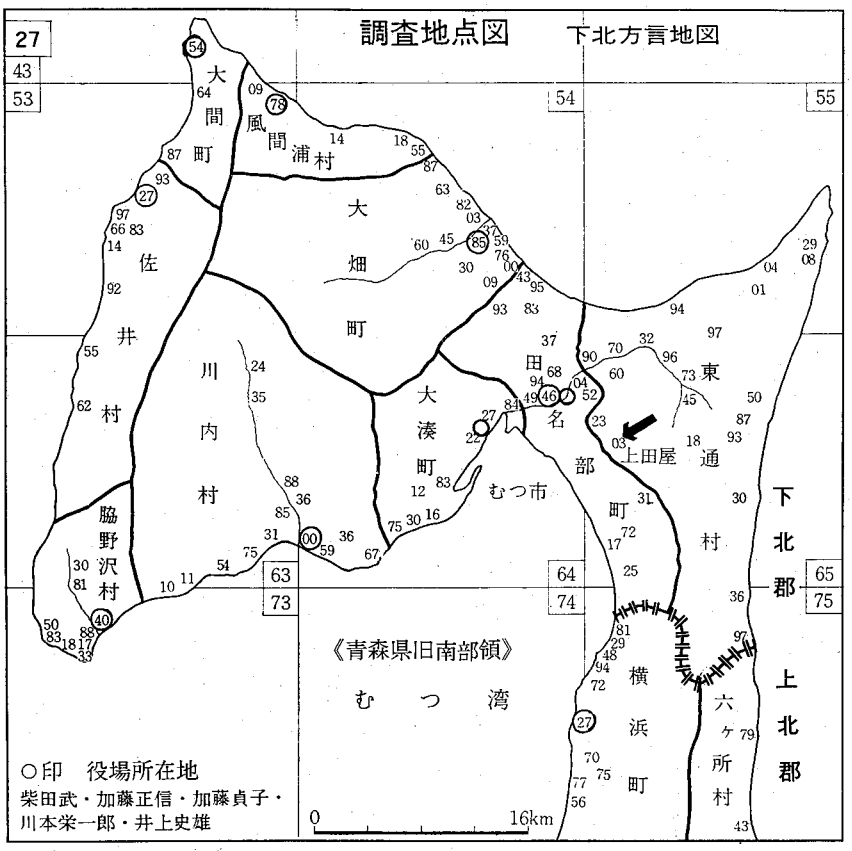
調査当時の人口は住民票によれば391名（教員も含め戸数64戸）[3]。そのうち調査対象とした昭和30年（1955年）以前出生の者（10歳以上）は326名。出稼ぎなどによる不在者が多く，調査できたのは259名だった。（調査忌避1名を除き，有資格者全員を調査し得た。）これを上田屋で育った「生え抜き」221名と，上田屋以外で生育した「よそ者」38名に分けた。よそ者は言語的に相当違うことが確認されたので，集計から一応除外した。上田屋内部の言語差・言語変化を確認することがこの調査の主目的だったからである。上田屋への語形の流入のプロセス，様々の社会条件と言語との相関などを研究する段階では，よそ者も集計の中に入れることになる。

この生え抜きの資料を，まず年齢層毎に集計した。年齢差はかなり忠実に言語変化を反映す

1　九学会連合下北調査委員会『下北——自然・文化・社会——』（平凡社，1967）
（第３章第４節下北方言の分布，pp.175－200）

2　同上，pp.183－188.

3　この地域は集落の規模が大きく，集落間の距離が長い。糸魚川（ことに早川谷）のように小さい集落がわずかの距離をおいて点在するのと，かなり景観が違う。



ると見られるからである。(後述のように留保すべき点はあるが。)当初4年齢層に分けて処理したが，サンプル数の多さからもう少し細かく分けても信頼できる結果が出そうなので，9年齢層に分けた。(10年ずつに分けたほか，10代の者は人数が多かったので3年齢層に細分した。)年齢層別による集計以外に性別・「田名部に出かける回数」別の集計も行なったが，別の機会に回す。

まず資料を一覧しよう。一集落内の年齢差と一地域での年齢差を対比するために，老年層と若年層の「下北方言地図」も掲げる[4]。各項毎に語史を推定し，必要なものには解説を付ける。

○以下には代表的な語形だけを，簡略音声表記で示す。音声的変種は記さない。アクセントも省略する。また語史の推定の大筋に関係せず上田屋に現われない稀な語形は，分布図に載せなかった。

○分布図の記号は，おおむね次の方針で与えた。

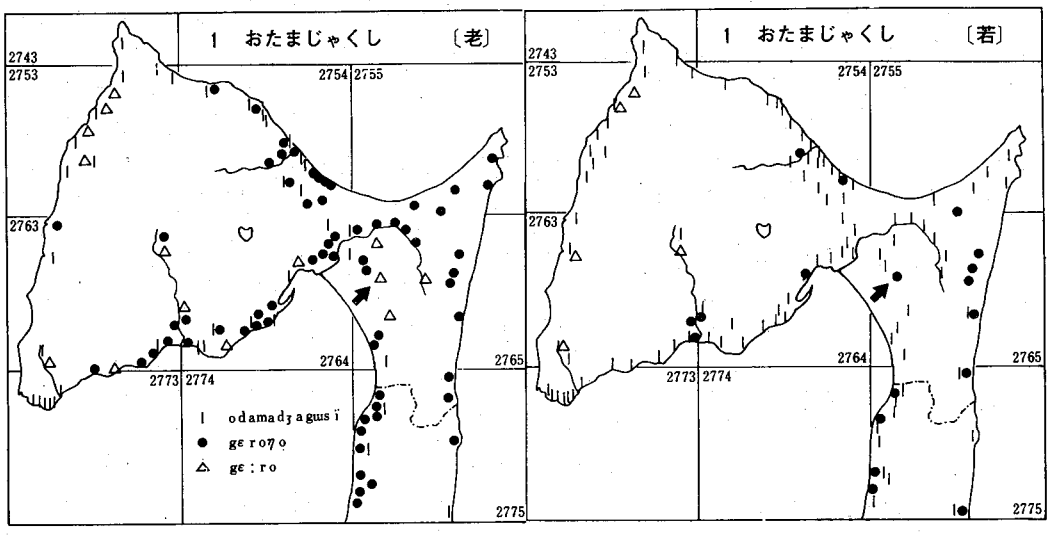
| 共通語形・新語形
● 古形，ことに東通村に分布するもの。
△ 古形，ことに西部に分布するものまたは●より新しいもの。

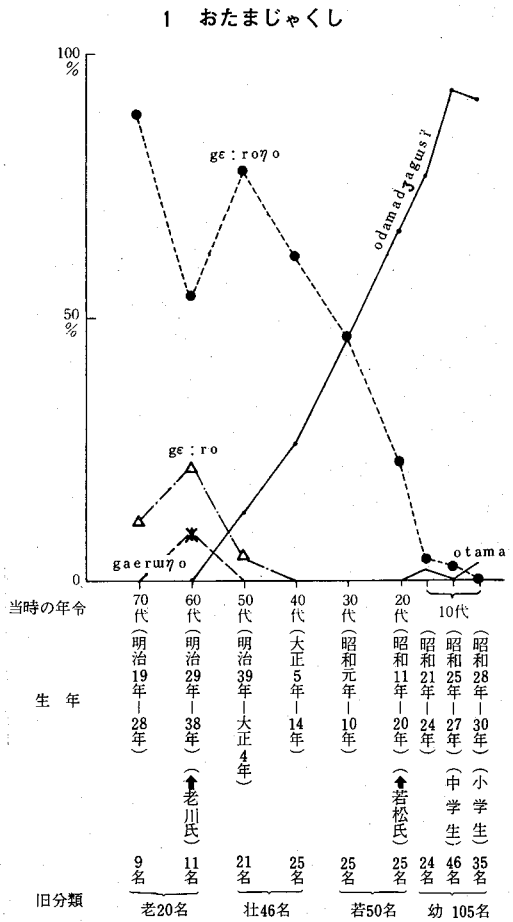
他の語形は以上の三基本形に変容を加えて示した。

○グラフおよび分布図の順序は，全員調査の質問番号による。No.21と22は手違いで2度現われたので，−2 を付す。

○分布図による語史の推定のうち，上田屋にも

4　説明およびインフォーマント一覧などについては注1の文献参照。





多く現われる語形は～～を付して示した。

1.おたまじゃくし（分布図ではbïkkïnoko省略）

下北半島の「蛙・おたまじゃくし・蛙の卵」の語史については『下北』[5](p.190f) に詳しい。上田屋付近での語史の推定は以下の通り。

gɛ:roŋo → gɛ:ro → odamadʒagɯsï

おたまじゃくしを gɛ:ro と呼ぶのは，蛙の意味でbïkkï という新形が入ったために，古形 gɛ:ro の意味分野を隣に移して生じたものである。

2.蛙（分布図でkawadzɯ など省略）

gɛ:ro → bïkkï → kaerɯ

3.蝸牛

「なめくじ・蝸牛」の語史については,『下北』(p.189f) に詳しい。

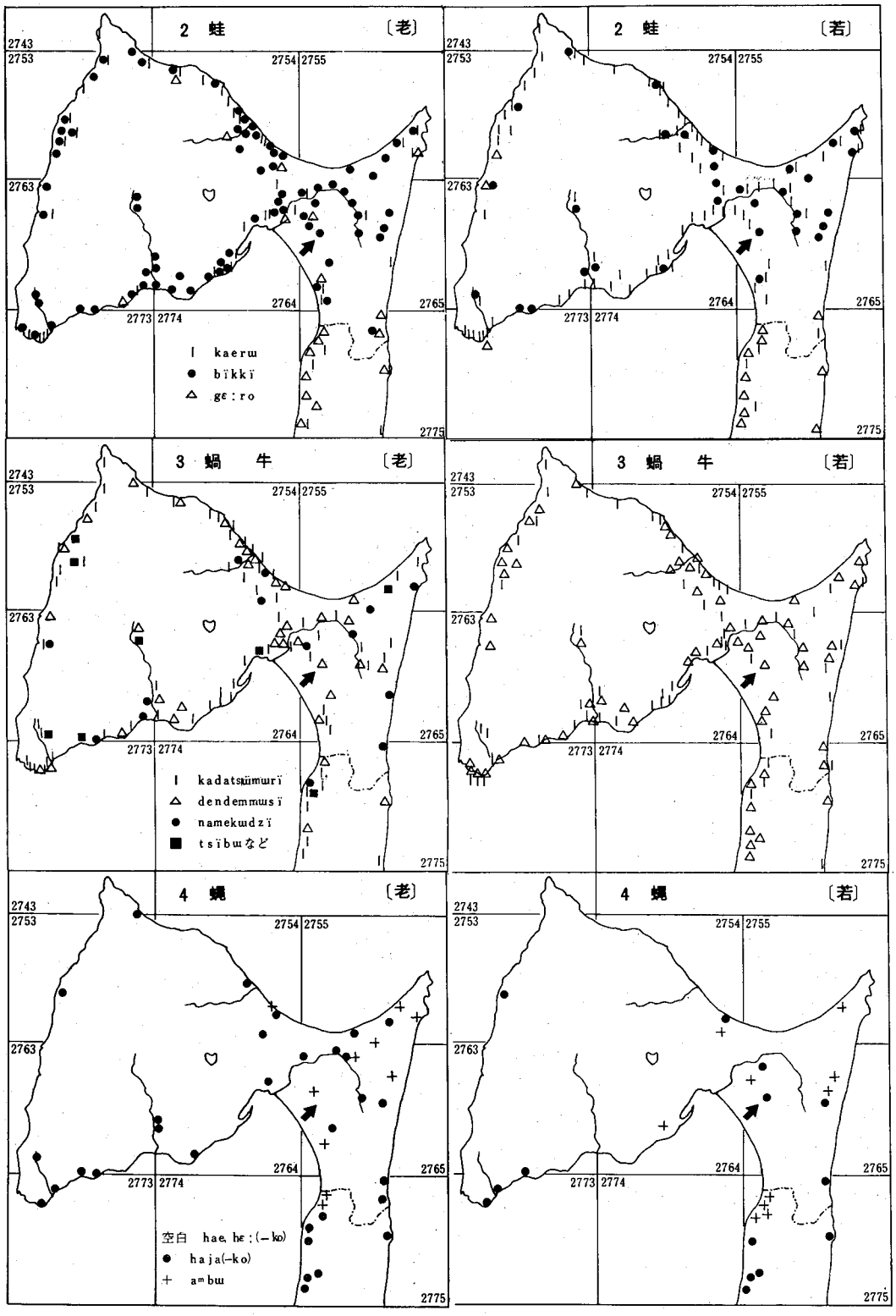
namekɯdzï, tsï^{m}bɯ → dendemmɯsï → kadatsümɯrï

蝸牛をなめくじとして把える傾向のほかに，「ツブ」（巻貝類一般，タニシなど）の一つとして把える傾向もあったらしいことがうかがえる。

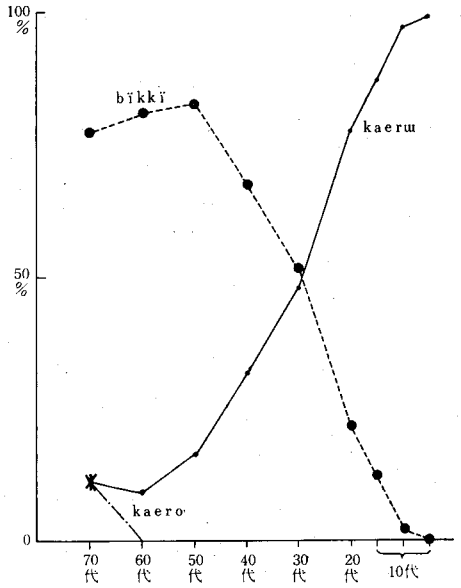
4.蠅

a^{m}bɯ → haja(ko) → hɛ:(ko)

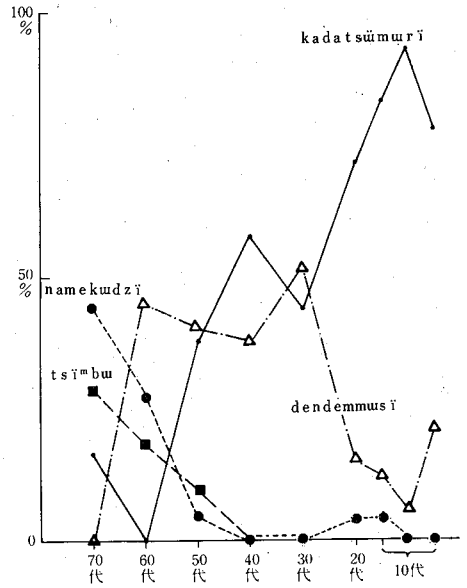
5 注1参照。


2 蛙 〔老〕
2743
2753
2754 2755
2763
2764
2765
2773 2774
2775
l kaerɯ
● bïkkï
△ gɛ:ro
2 蛙 〔若〕
3 蝸 牛 〔老〕
l kadatsɯ̈mɯrï
△ dendemmɯsï
● namekɯdzï
■ tsïbɯなど
3 蝸 牛 〔若〕
4 蝿 〔老〕
空白 hae, hɛ:(−ko)
● haja(−ko)
+ ambɯ
4 蝿 〔若〕

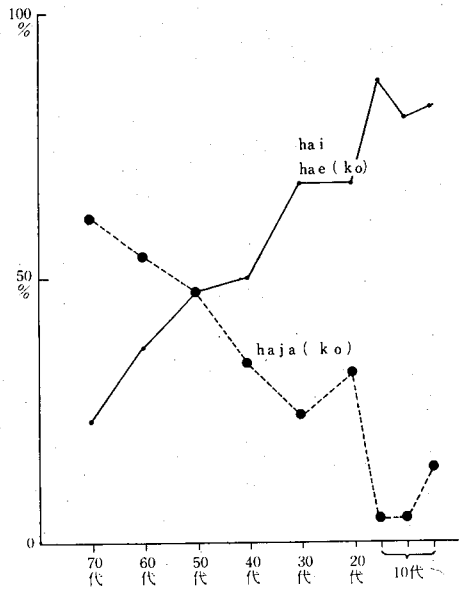
2 蛙



3 蝸 牛



4 蝿



5.げんのしょうこ

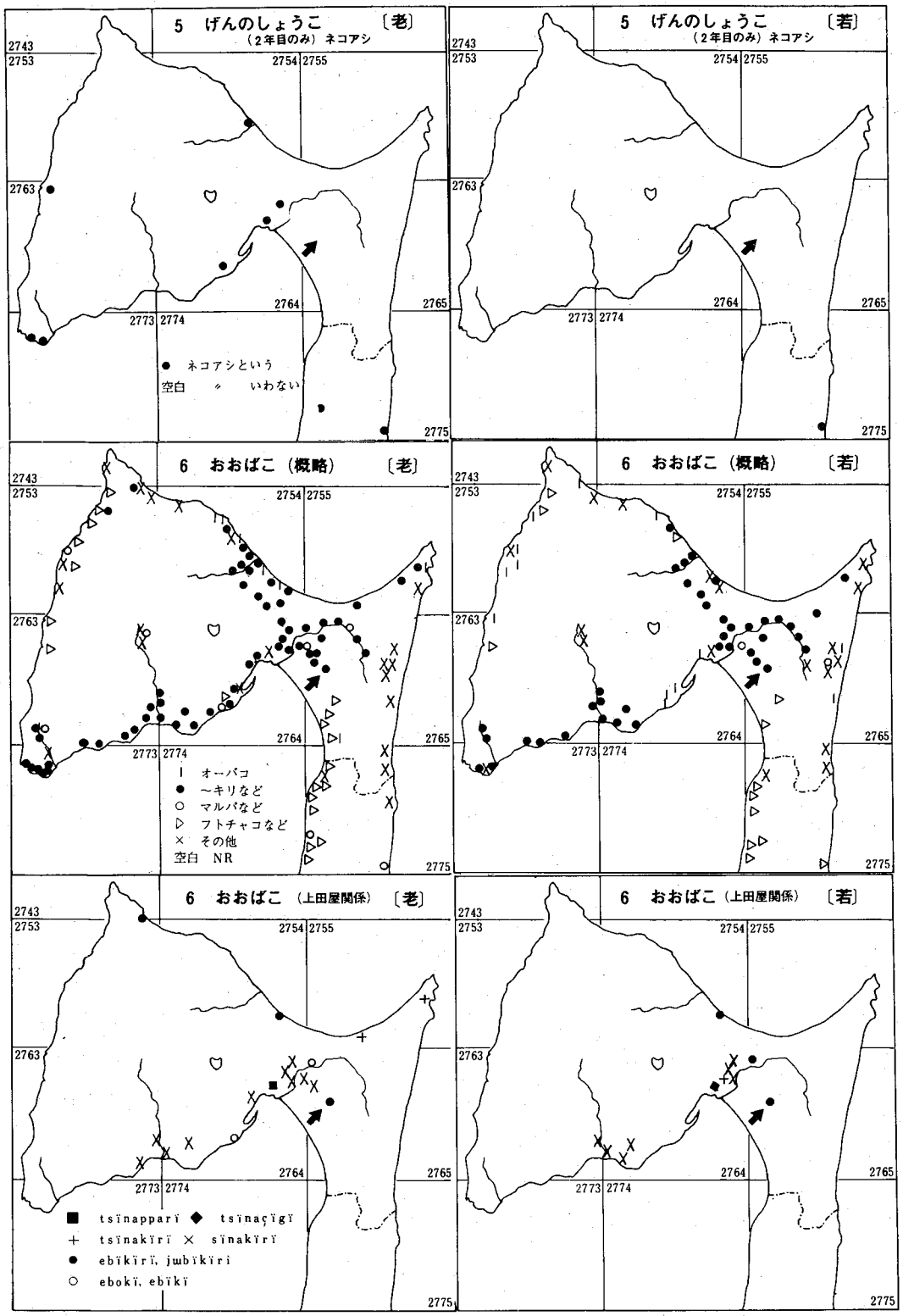
語形の分布図によれば kaɲɯraɲɯsa → genno∫o:ko への変化が明瞭に読みとれる。少数出て来た「猫足」を理解語として聞いたものである。上田屋付近ではほとんど言わない。別称（併存形）として津軽あたりから入りかけたものか。

6.おおばこ（概略図）

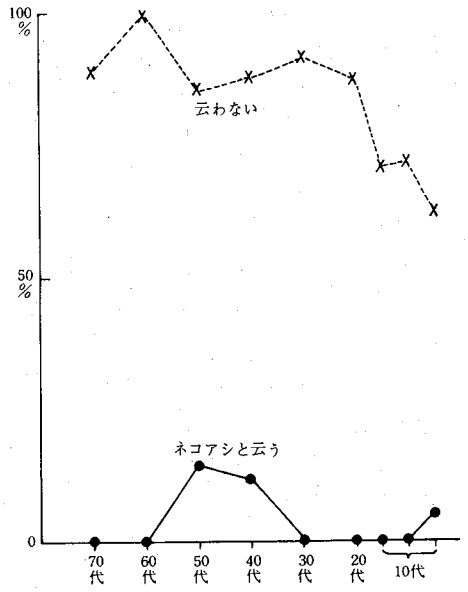
分布図での語形の種類が最も多い項目である。老では発音の変種をまとめても52種ある。これらを大まかにまとめると，オーバコ，～キリなど（茎を切り合う遊びからの命名），マルパなど（葉の形に着目），フトチャコなど（葉を束ねて，つまんでお手玉のように遊ぶ時のかけ声から），その他，に分けられる。分布から再構される語史は：

フトチャコ⟶～キリ ⟶オーバコ
　　マルパ ↗

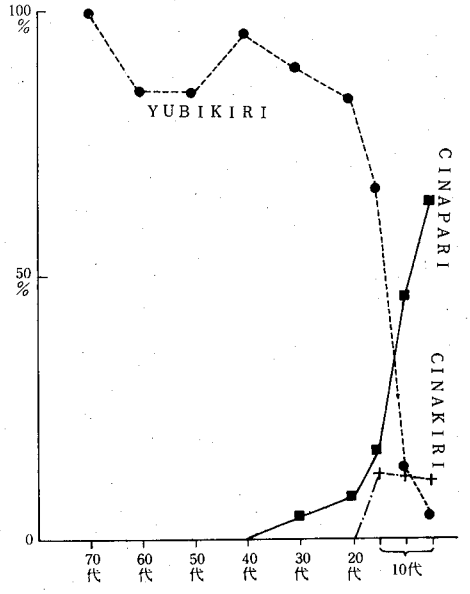
ただしフトチャコは，海を渡って来た新形とも考え得る。


5　げんのしょうこ　〔老〕
（2年目のみ）ネコアシ
● ネコアシという
空白　〃　いわない
5　げんのしょうこ　〔若〕
（2年目のみ）ネコアシ
6　おおばこ（概略）　〔老〕
I　オーバコ
●　〜キリなど
○　マルバなど
▷　フトチャコなど
×　その他
空白　NR
6　おおばこ（概略）　〔若〕
6　おおばこ（上田屋関係）　〔老〕
■　tsïnapparï　◆　tsïnaçïgï
＋　tsïnakïrï　×　sïnakïrï
●　ebïkïrï, jubïkïri
○　ebokï, ebïkï
6　おおばこ（上田屋関係）　〔若〕
2743
2753
2754
2755
2763
2764
2765
2773
2774
2775

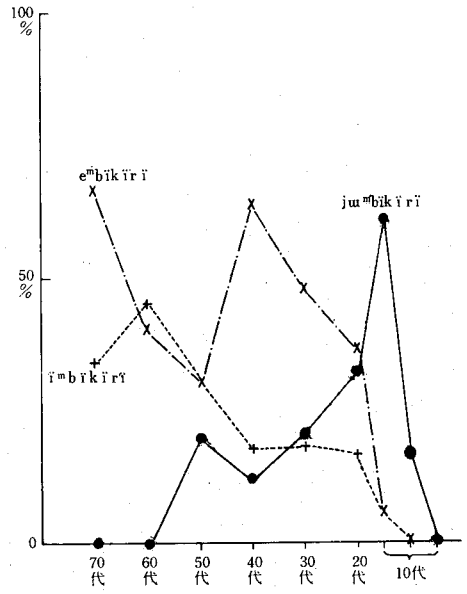
5　げんのしょうこ　ネコアシ



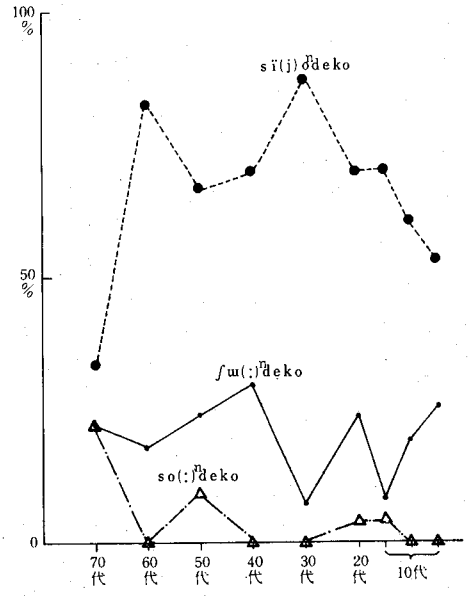
6　おおばこ（概略）

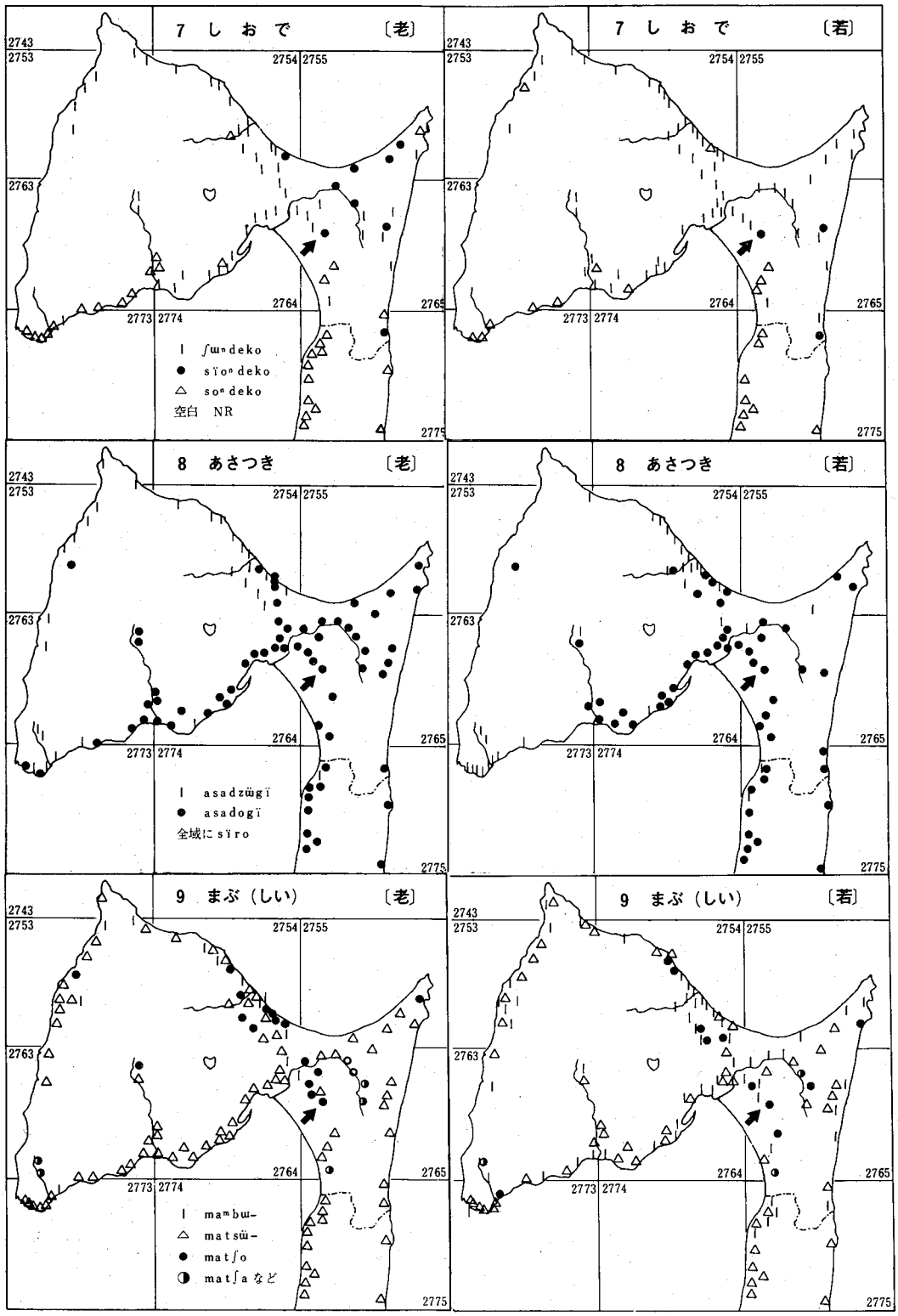


6　おおばこ（YUBIKIRIの詳細）
（NRを除く）



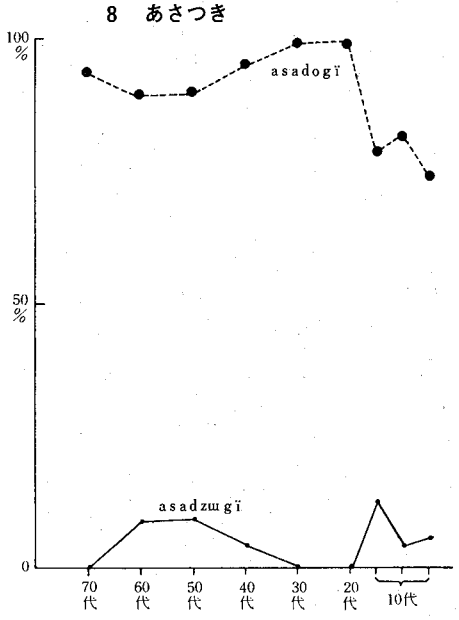
7　し　お　で

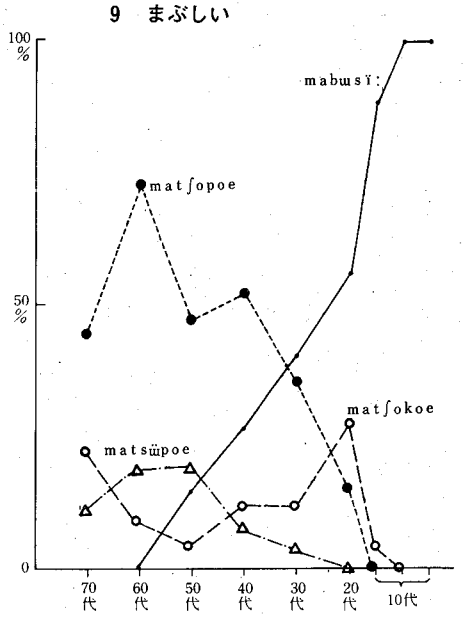


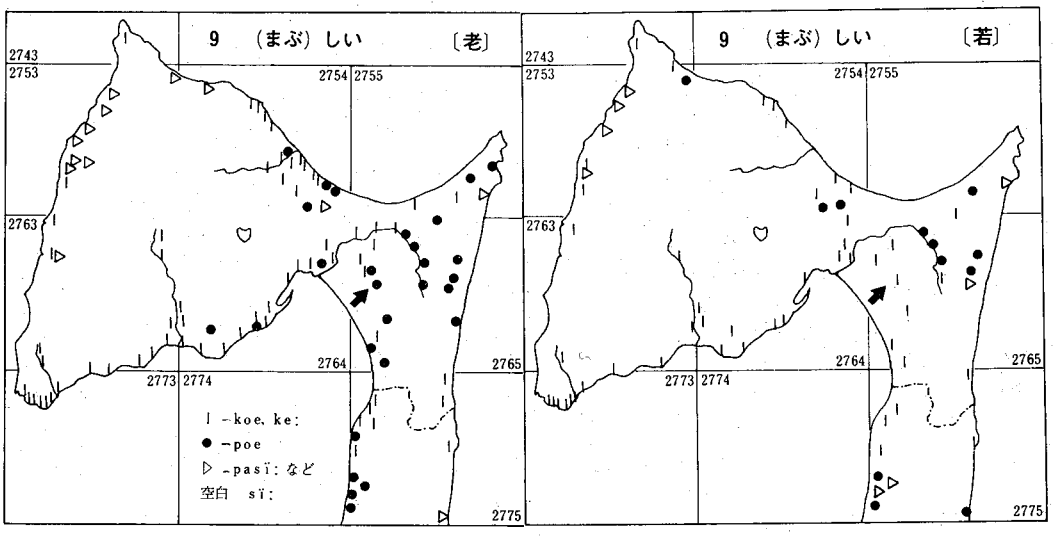

7 しおで 〔老〕
l ʃɯⁿdeko
● sïoⁿdeko
△ soⁿdeko
空白 NR
7 しおで 〔若〕
8 あさつき 〔老〕
l asadzɯ̈gï
● asadogï
全域にsïro
8 あさつき 〔若〕
9 まぶ（しい） 〔老〕
l maᵐbɯ−
△ matsɯ̈−
● matʃo
◑ matʃaなど
9 まぶ（しい） 〔若〕
2743
2753
2754
2755
2763
2764
2765
2773
2774
2775

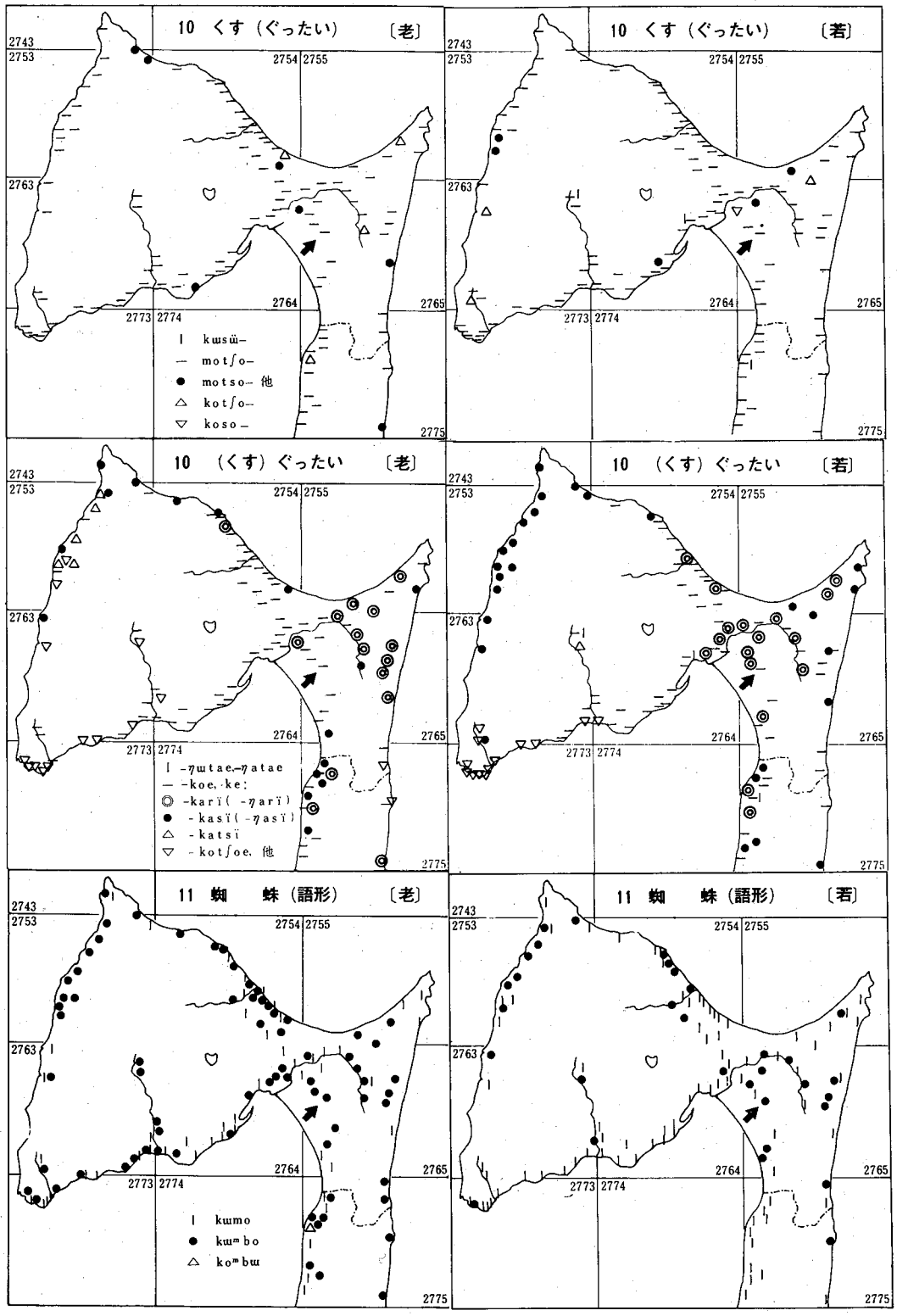
6.おおばこ（上田屋関係）

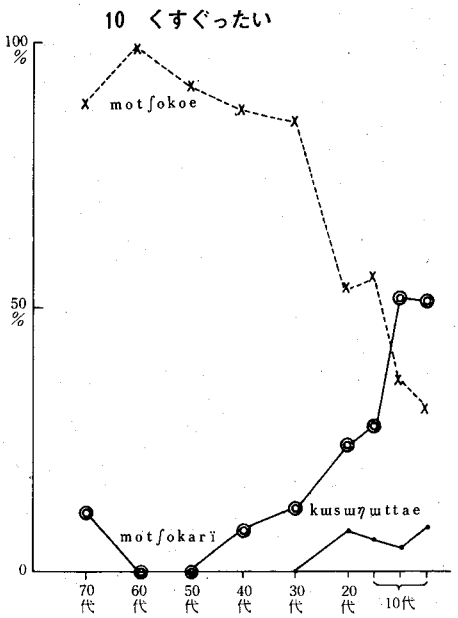
上田屋で突然盛んになったツナパリは，遊びを「綱引き」（方言ではツナヒッパリというらしい）に見たてた所から（また恐らく約束事の動作を言う「指切り」との同音衝突を避けるため）生じた語形であろう。田名部町の西側に見られるtsïnapparï, tsïnaçïgï と どんな関係にあるのか，どんな伝播があったのか，興味深い。上田屋の10代でわずかに見られるツナキリは，ユビキリと新形ツナパリとの混交形とも考えら

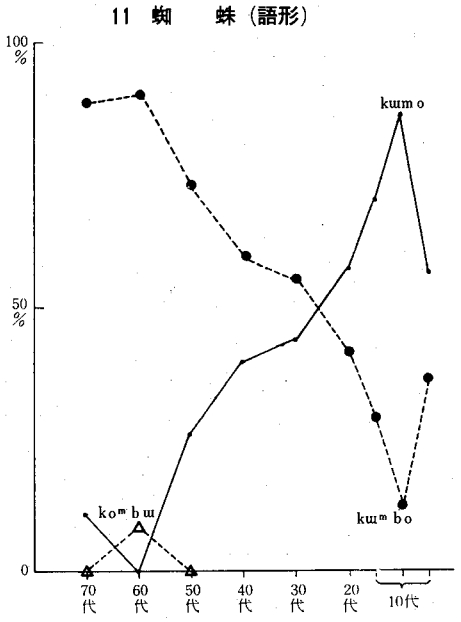


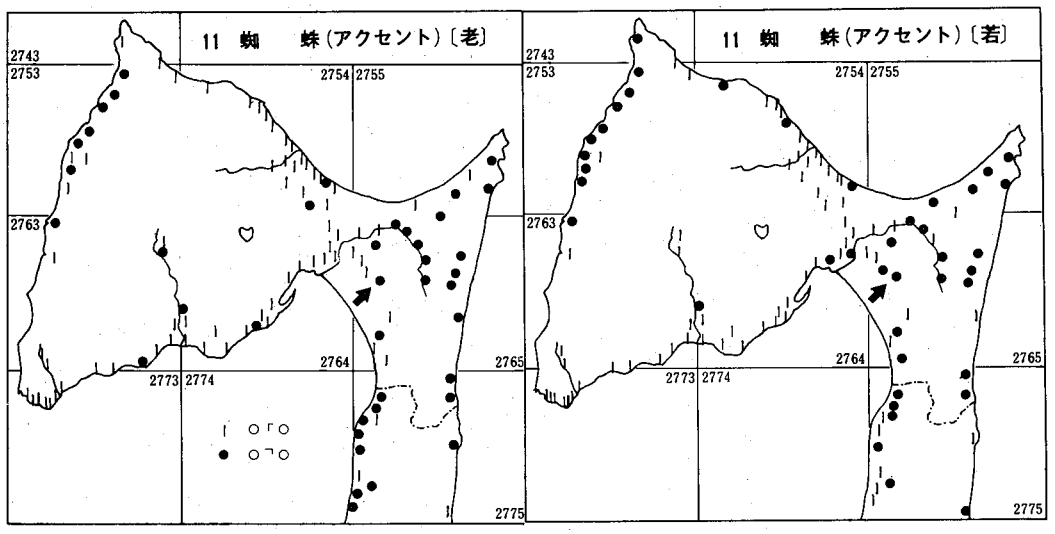





10　くす（ぐったい）　〔老〕
10　くす（ぐったい）　〔若〕
10　（くす）ぐったい　〔老〕
10　（くす）ぐったい　〔若〕
11　蜘　蛛（語形）　〔老〕
11　蜘　蛛（語形）　〔若〕
2743
2753
2754
2755
2763
2764
2765
2773
2774
2775
kɯsɯ̈–
motʃo–
motso– 他
kotʃo–
koso–
–ŋɯtae,–ŋatae
–koe, –ke:
–karï(–ŋarï)
–kasï(–ŋasï)
–katsï
–kotʃoe, 他
kɯmo
kɯᵐbo
koᵐbɯ







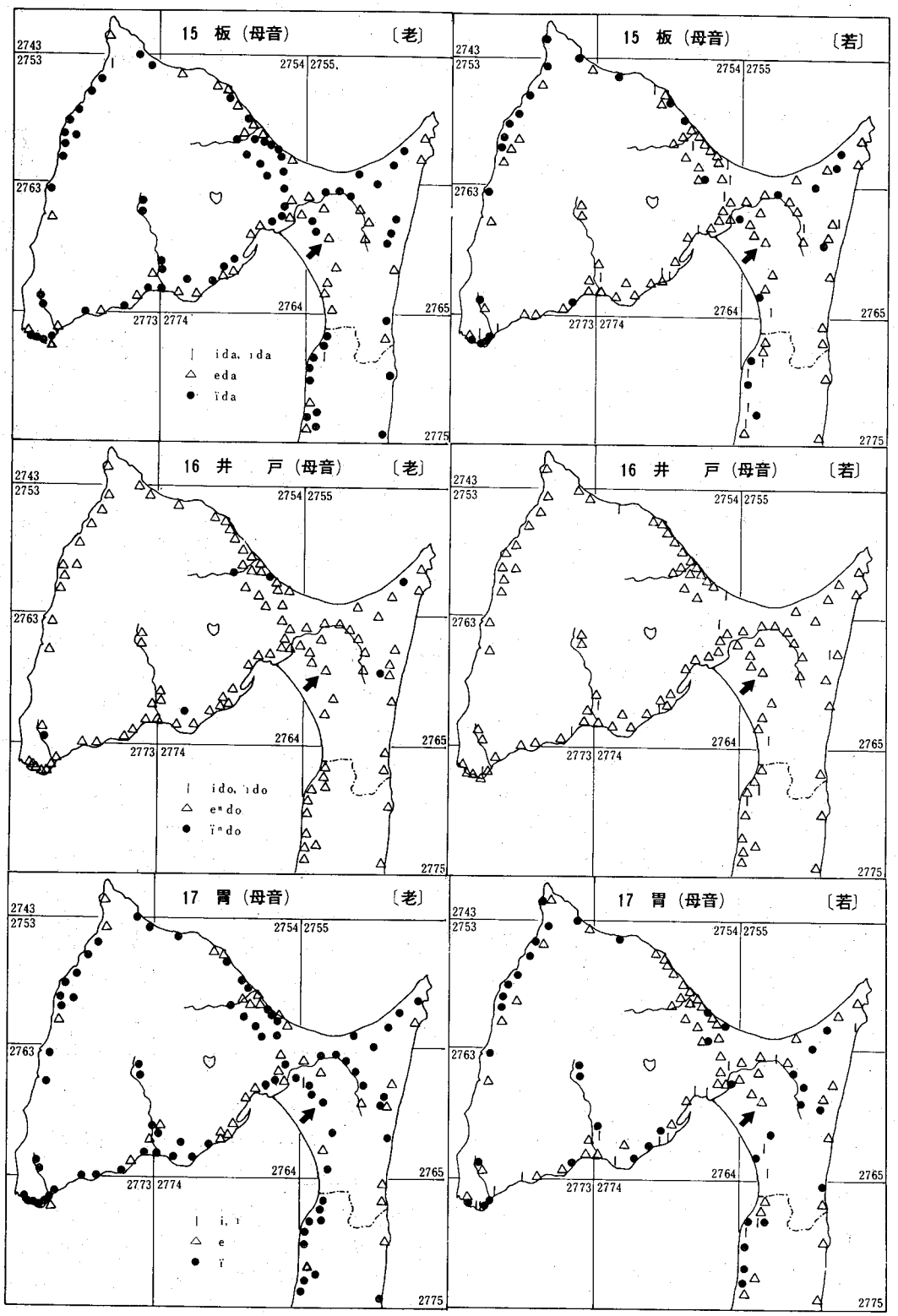
れる。また，ツナキリは他集落にもあるから，ユビキリ⟶ツナキリ⟶ツナパリと段階的に変化したことも考えられるが，そもそもツナキリと命名された起原が不明である。

7. し お で

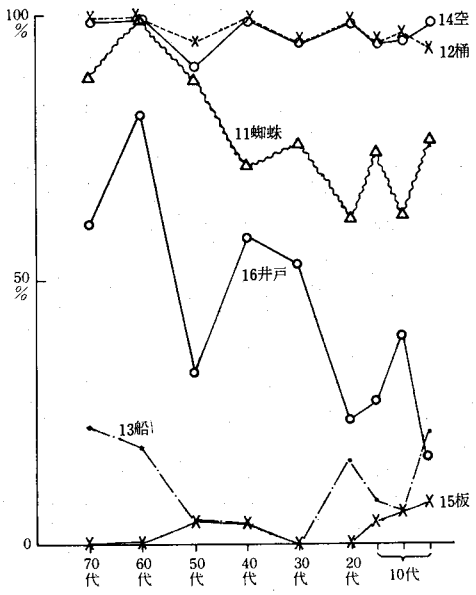
この語史については「あやめ」とからめて川本氏の推定がある[6]。

sïoⁿdeko → soⁿdeko → ʃɯⁿdeko

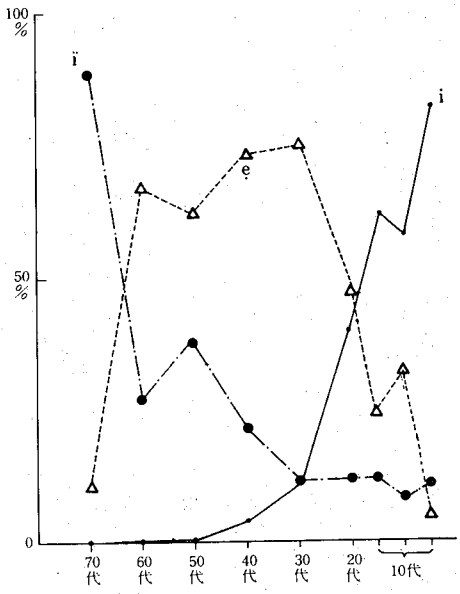
6　川本栄一郎「青森県下北地方における『あやめ』の方言分布とその解釈」国語学67集（1966）pp.47－59，そのp.59注2.


15 板（母音） 〔老〕
15 板（母音） 〔若〕
16 井　戸（母音） 〔老〕
16 井　戸（母音） 〔若〕
17 胃（母音） 〔老〕
17 胃（母音） 〔若〕
2743
2753
2754
2755
2763
2764
2765
2773
2774
2775

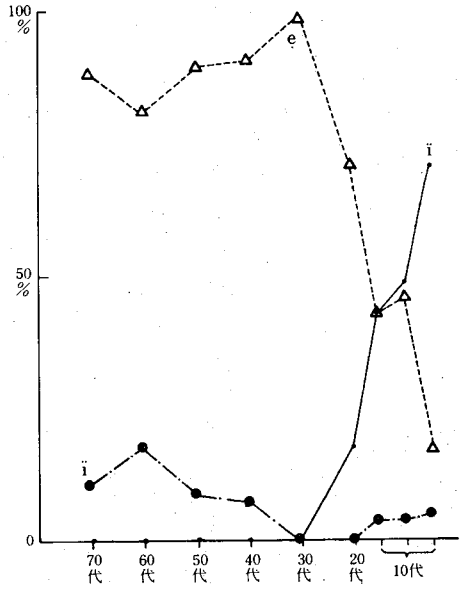
11—16　頭高のアクセント（O͡O）



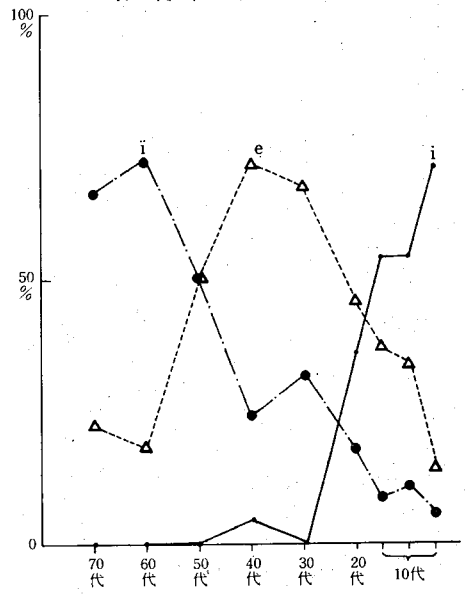
15　板（母音）

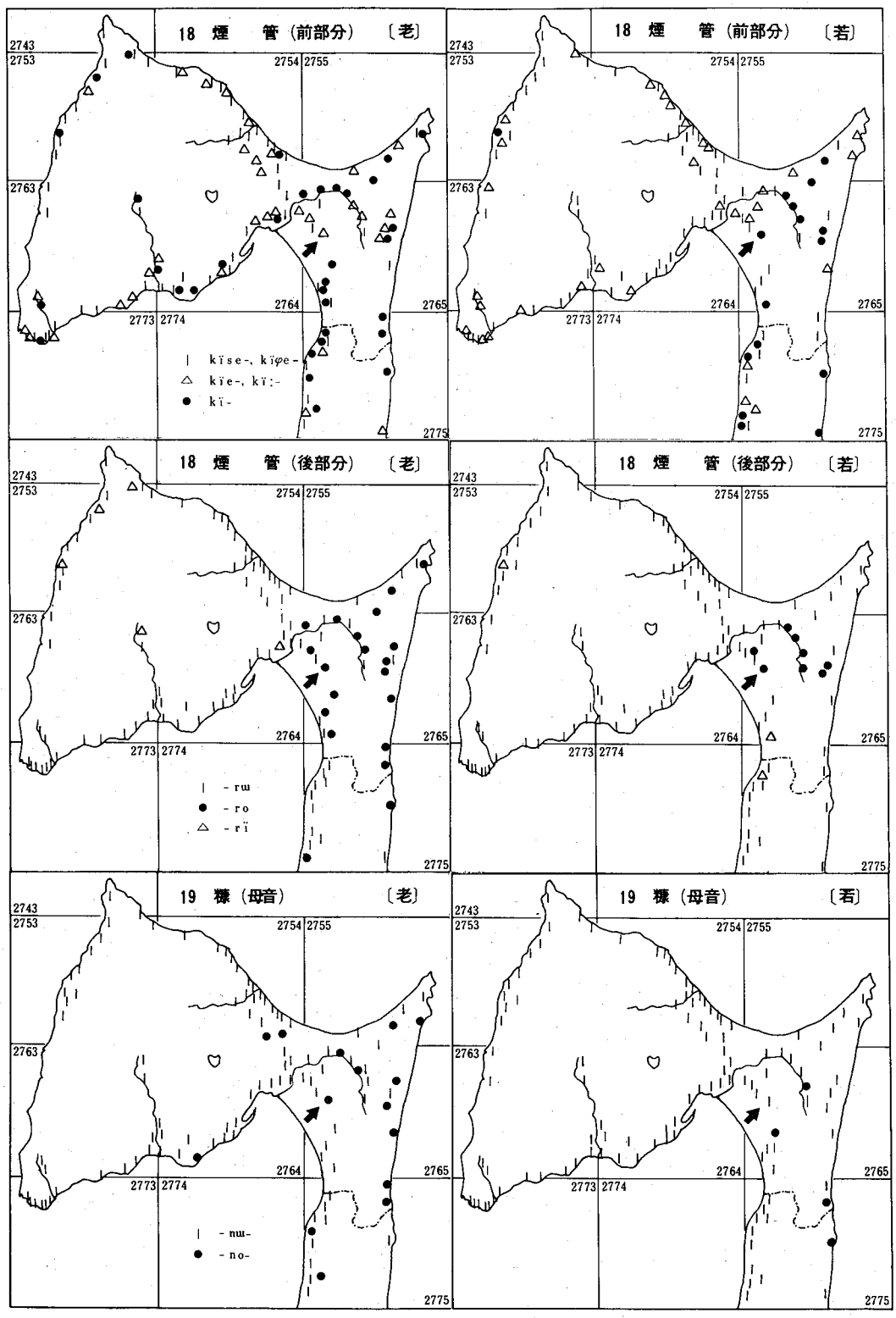


16　井　　戸（母音）

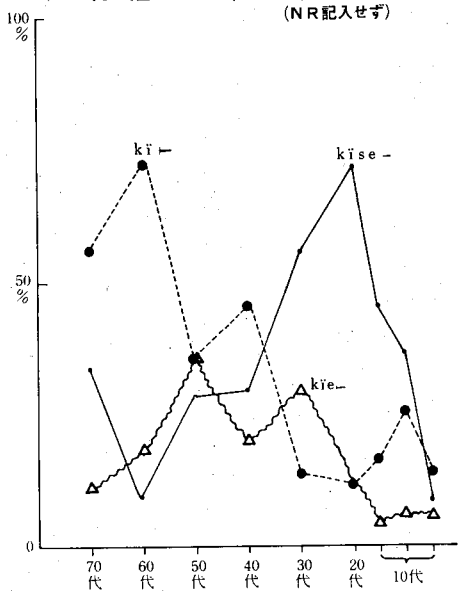


17　胃（母音）

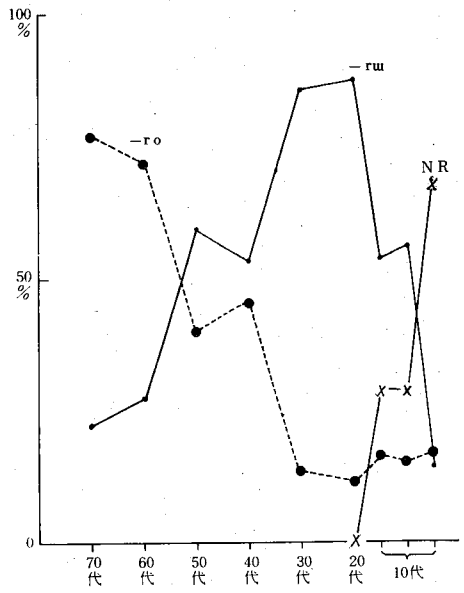



18　煙　　管（前部分）　〔老〕
18　煙　　管（前部分）　〔若〕
18　煙　　管（後部分）　〔老〕
18　煙　　管（後部分）　〔若〕
19　糠（母音）　〔老〕
19　糠（母音）　〔若〕
2743
2753
2754
2755
2763
2764
2765
2773
2774
2775
kïse-, kïɸe-
kïe-, kï:-
kï-
-ɯ
-o
-rï
-nɯ-
-no-

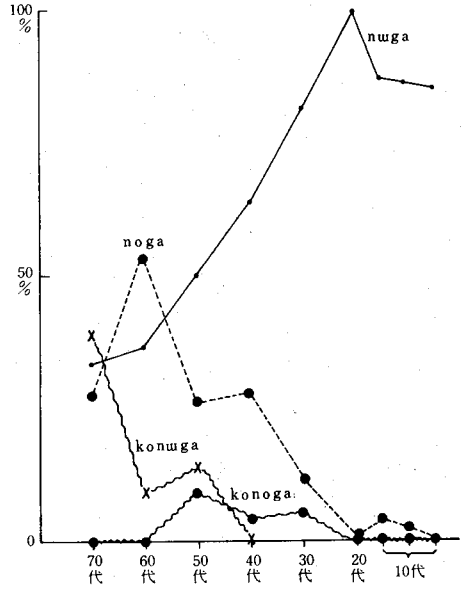
18 煙　管（前部分）
（NR記入せず）



18 煙　管（後部分）



19 糠



8.あさつき

分布図から，asadogï → asadzɯgï

9.まぶしい

{ matʃa- → matʃo- → matsɯ- → mabɯ-
{ -pasï など → -poe → -koe → -sï:

10.くすぐったい

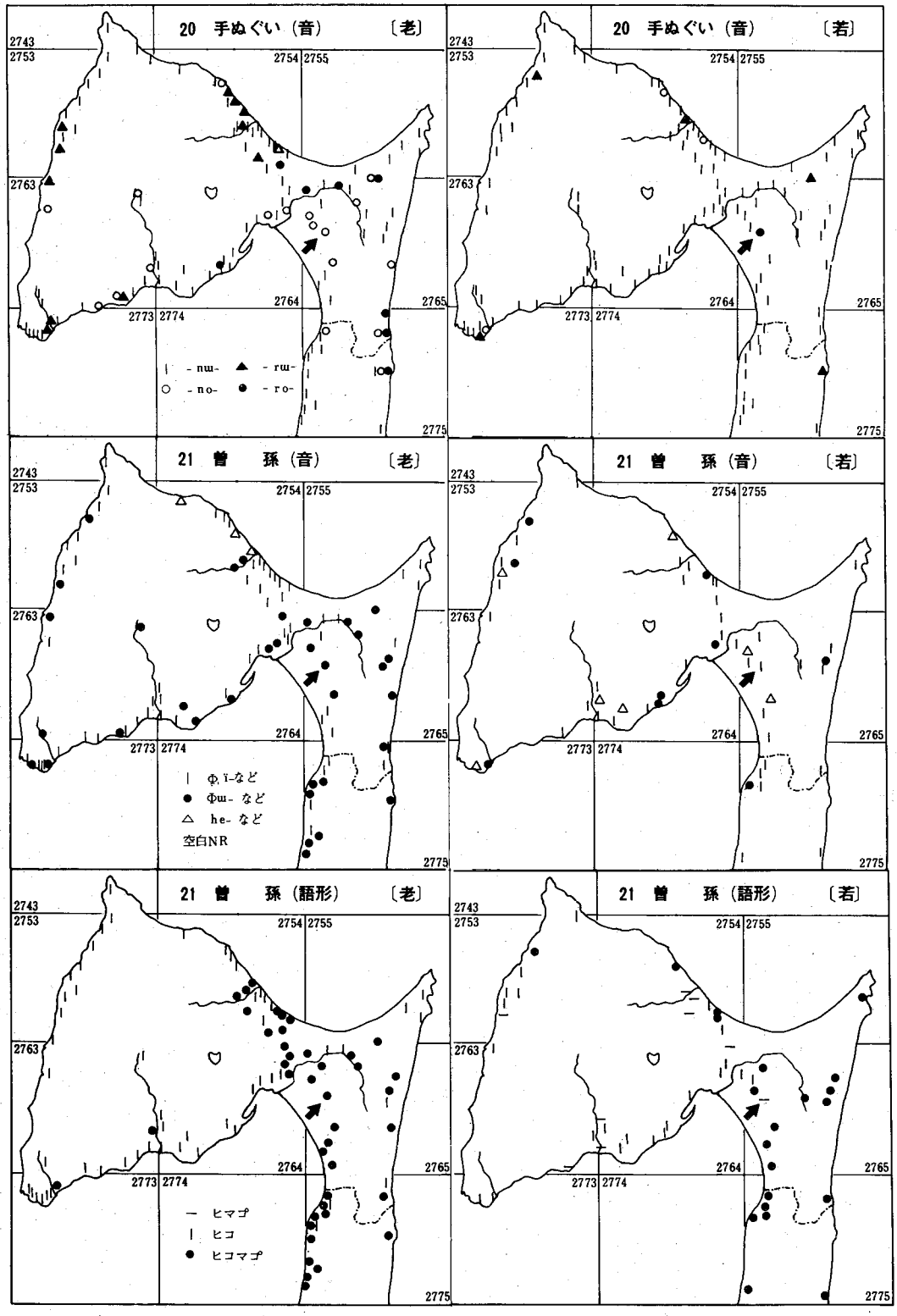
LAJ[7]（32・33図，81・82図）によれば，青森県旧南部領ではくすぐったいがMOCYOKOI くすぐるがKOCYOGASUで，前部分の形態素が一致しない。ために，前部分については混交も起きたらしい。

motʃo- → kɯsɯ-
↓?
motso-　　kotʃo- → koso-

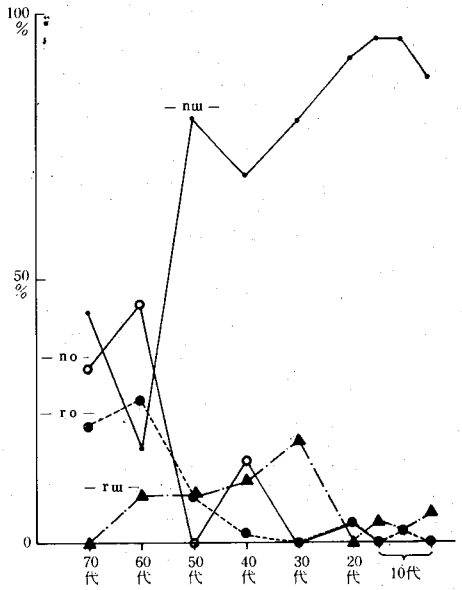
後半については，後に詳述。

-katsï → -kasï → -koe → -ŋɯtaeなど
-kotʃoe ↗　　↘ -karï

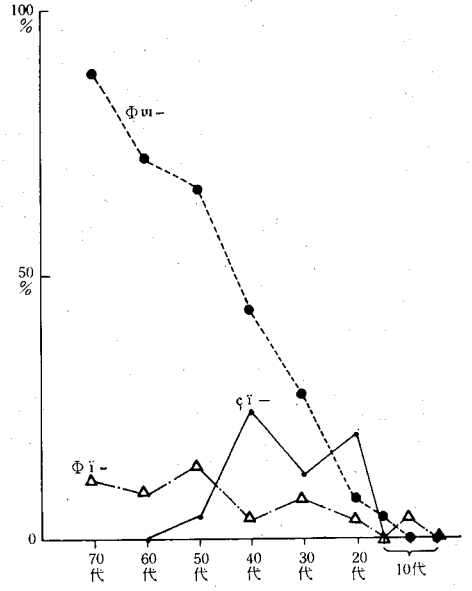
7　国立国語研究所『日本言語地図』(1～6集)（大蔵省印刷局，1966～1974）


20　手ぬぐい（音）　〔老〕
20　手ぬぐい（音）　〔若〕
21　曽　孫（音）　〔老〕
21　曽　孫（音）　〔若〕
21　曽　孫（語形）　〔老〕
21　曽　孫（語形）　〔若〕
2743
2753
2754
2755
2763
2764
2765
2773
2774
2775
- nɯ-
- rɯ-
- no-
- ro-
Φi-など
Φɯ- など
he- など
空白NR
ヒマゴ
ヒコ
ヒコマゴ

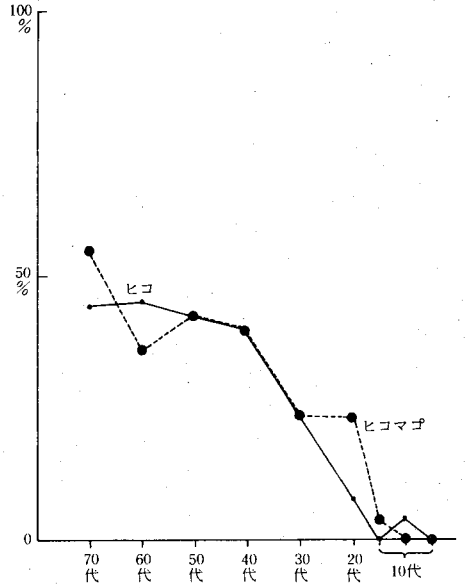
20　手ぬぐい（音）



21　曽　　孫（音）



21　曽　　孫（語形）



11.蜘蛛

$ko^{m}bɯ \rightarrow kɯ^{m}bo \rightarrow kɯmo$

コブは少数例しかないが，九州と同様辺境に古語が残存した例と考えられる（方言集によれば岩手県にもある。）

11～16.頭高のアクセント（2拍名詞第4･5類）

『下北』p.193ff. に詳しい地図あり。ここでは11蜘蛛のみ掲げる。

○┐○ → ○┌○┐

の歴史が見られるが，単語により異なる。

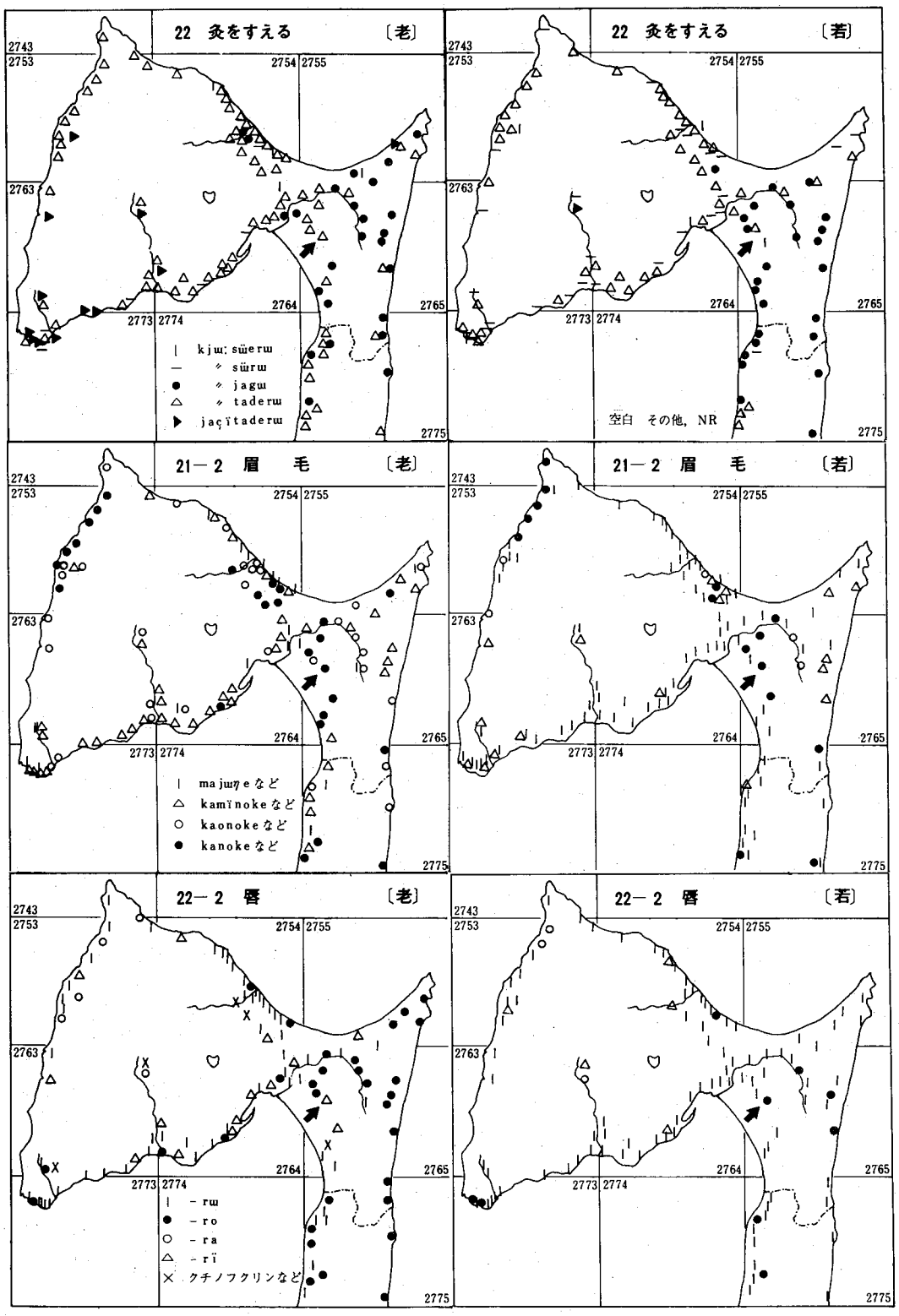
15～17.母音イ

川本氏に詳しい論考がある[8]。

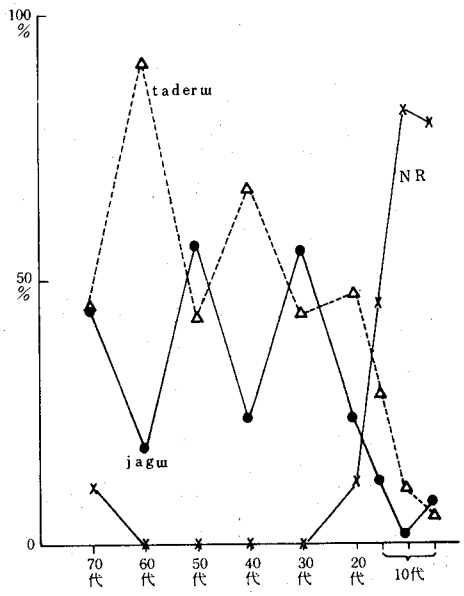
/i/〔ĭ〕 → /e/〔e〕 → /i/〔i〕

であり，最後の段階は共通語化である。三語ともそれぞれ地理的分布が異なり，年齢変化も，ほぼそれに対応して異なる。

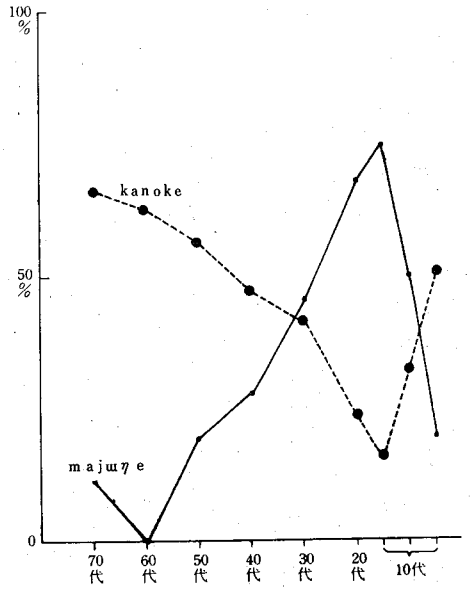
8　川本栄一郎「青森県下北方言の『イ』と『ウ』」国語学61集（1965）pp.16－28.


22　灸をすえる　〔老〕
2743
2753
2754
2755
2763
2764
2765
2773
2774
2775
| kjɯ; sɯ̈erɯ
— 〃 sɯ̈rɯ
● 〃 jagɯ
△ 〃 taderɯ
▶ jaçïtaderɯ
22　灸をすえる　〔若〕
空白　その他，NR
21—2　眉　毛　〔老〕
| majɯŋeなど
△ kamïnokeなど
○ kaonokeなど
● kanokeなど
21—2　眉　毛　〔若〕
22—2　唇　〔老〕
| －rɯ
● －ro
○ －ra
△ －rï
× クチノフクリンなど
22—2　唇　〔若〕

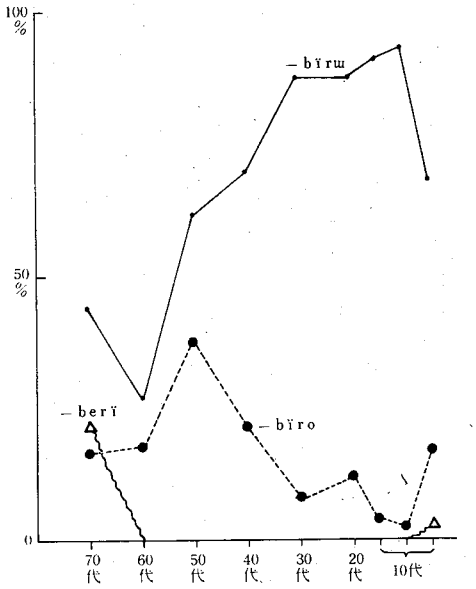
22　(灸を) すえる



21－2　眉　毛



22－2　唇



18.煙管

kï- → kïe- → kïse-

訛った形がまず移入され，後に共通語化したのだろう。

-rï → -ro → rɯ

このうち ro と r ɯ については 下北方言のウ段音の歴史参照[9]。

19.糠

『下北』p.183f. にも取り上げてあるため語形の地図は略す。

$$kon\begin{Bmatrix}ɯ\\o\end{Bmatrix}ga \rightarrow n\begin{Bmatrix}ɯ\\o\end{Bmatrix}ga$$

nɯ と no はウ段音の歴史の問題。

-no- → -nɯ-

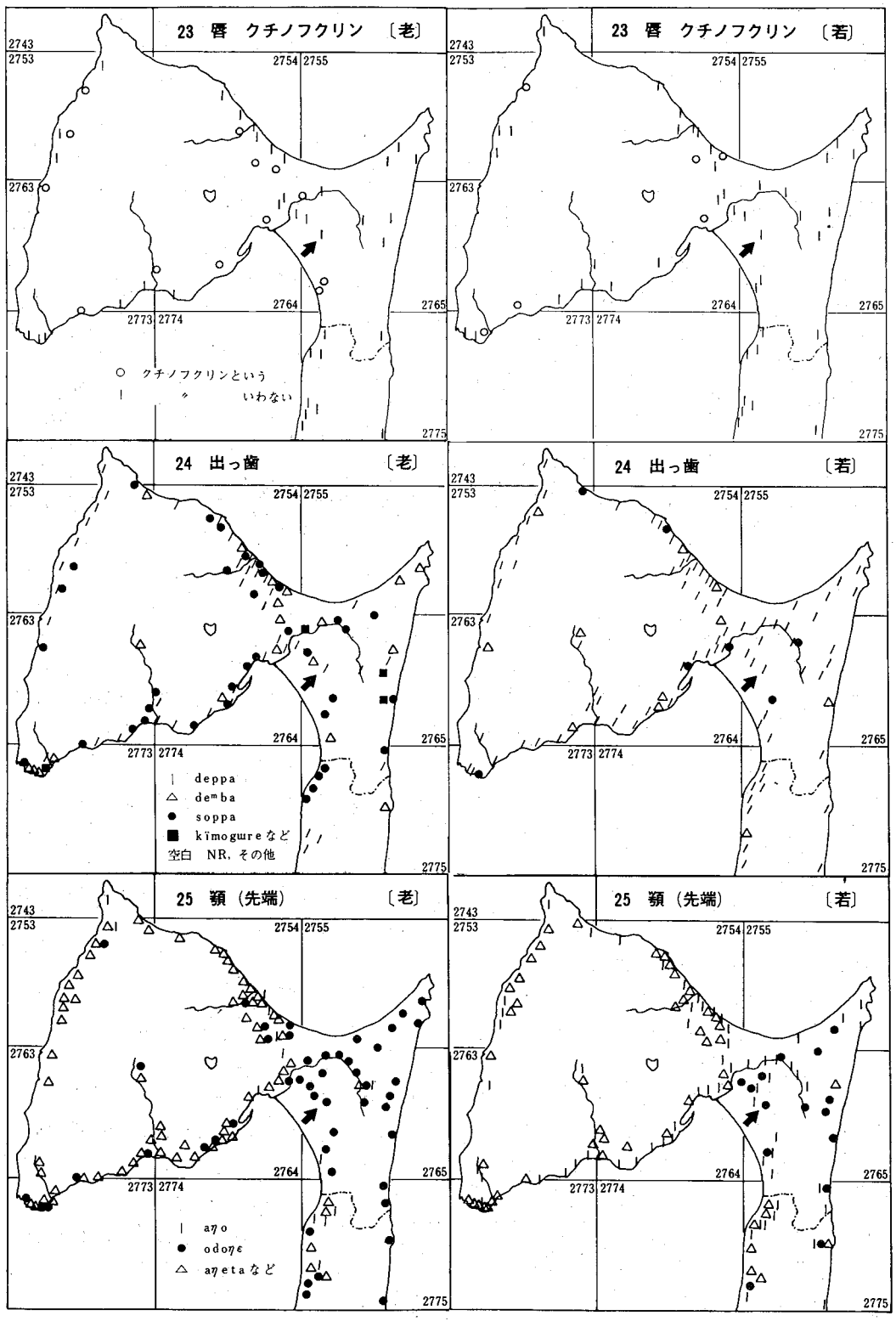
20.手拭

-o- と -ɯ- についてはウ段音の歴史参照。

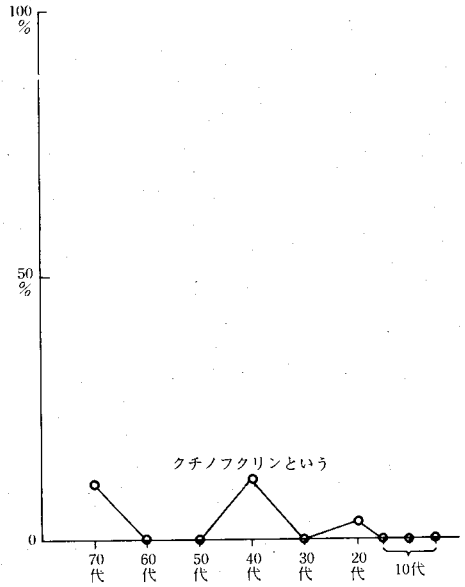
-no- → -nɯ-

-ro- → -rɯ-

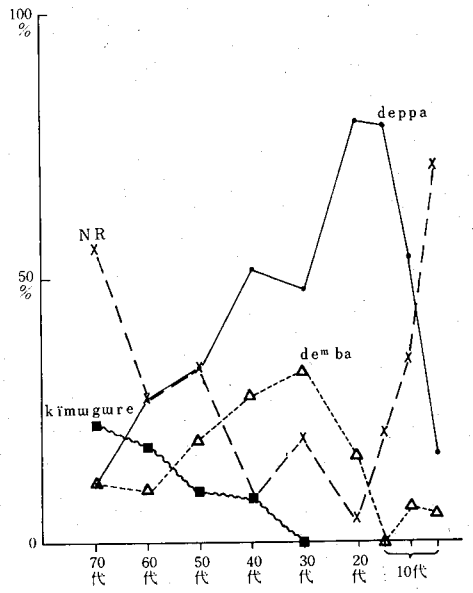
9　川本栄一郎「青森県下北方言におけるウ段音」国語学研究 3 (1963) pp.74－85.


23 唇　クチノフクリン　〔老〕
○ クチノフクリンという
| 〃 いわない
23 唇　クチノフクリン　〔若〕
24 出っ歯　〔老〕
| deppa
△ demba
● soppa
■ kïmogureなど
空白　NR, その他
24 出っ歯　〔若〕
25 額（先端）　〔老〕
| aŋo
● odoŋe
△ aŋetaなど
25 額（先端）　〔若〕
2743
2753
2754
2755
2763
2764
2765
2773
2774
2775

23 唇 クチノフクリン



24 出っ 歯



21.曽孫

（jasaŋo, maŋo は分布図で省略）

（*Φï- → ）Φɯ- → Φï-(çï-), he-

ヒ→フの例は**26.肘**にも見られる。規則的な音韻変化を反映するものだろう。

-komaŋo → -ko → -maŋo

22.灸をすえる

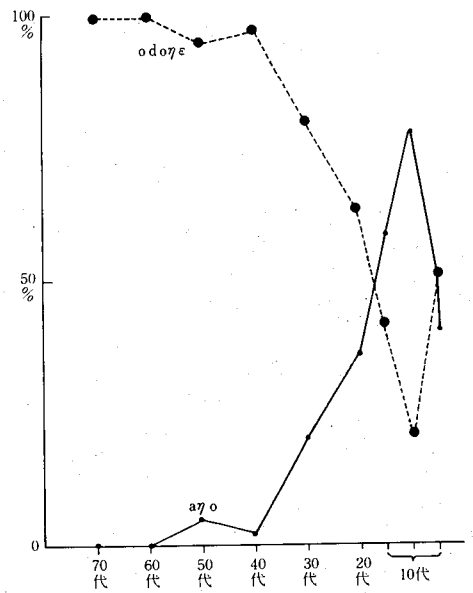
上田屋の年齢変化のジグザグからは両形の新古不明。老若の分布により次のように推定できる。

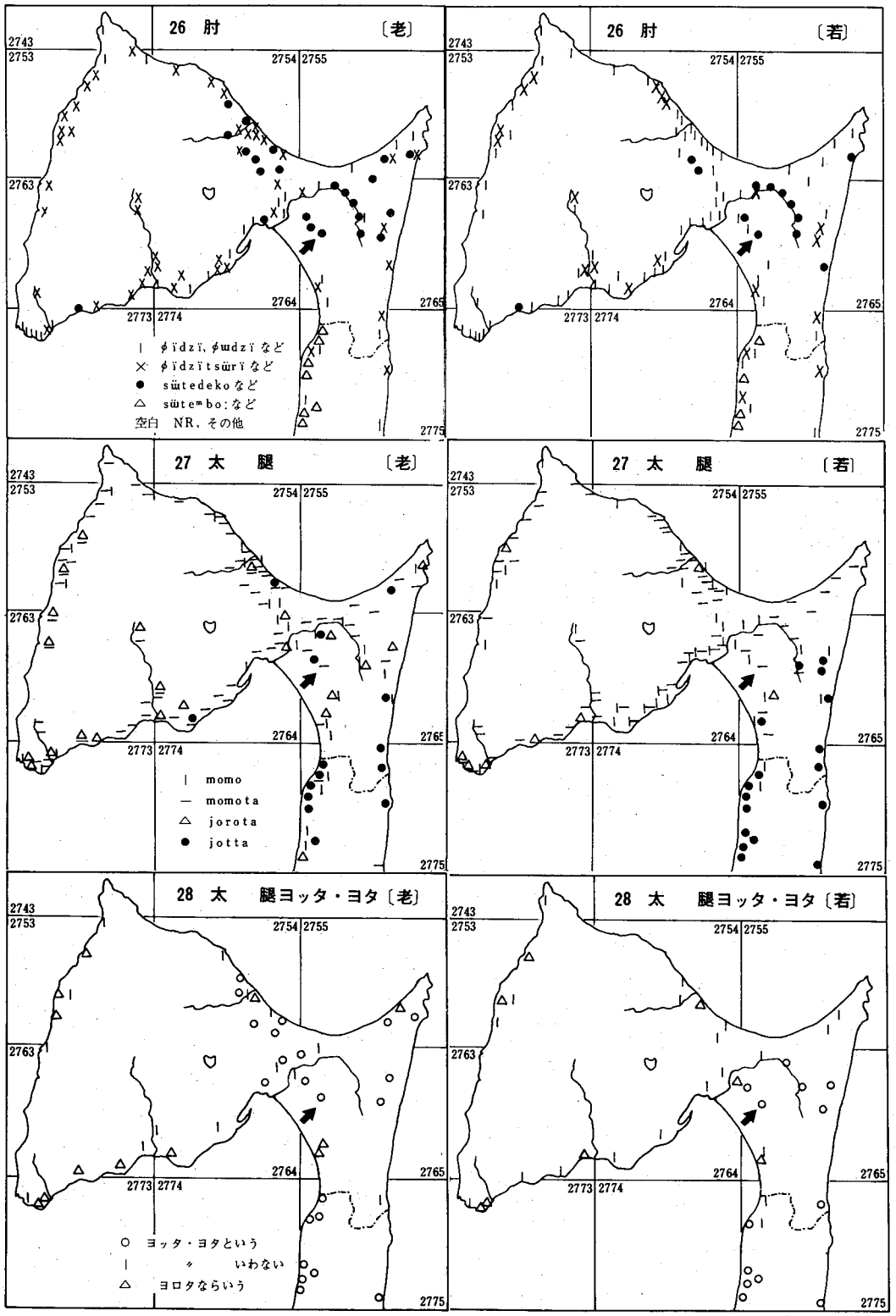
jaɡɯ → taderɯ → sɯrɯ → sɯerɯ

上田屋の内部の年齢差が不明瞭なのは，一つには若い方でNRが多く，新形に当るものが出て来ないこと；また，年上の人が言うのを聞いて習得することが多いため古い言い方が残りやすいのかもしれない。

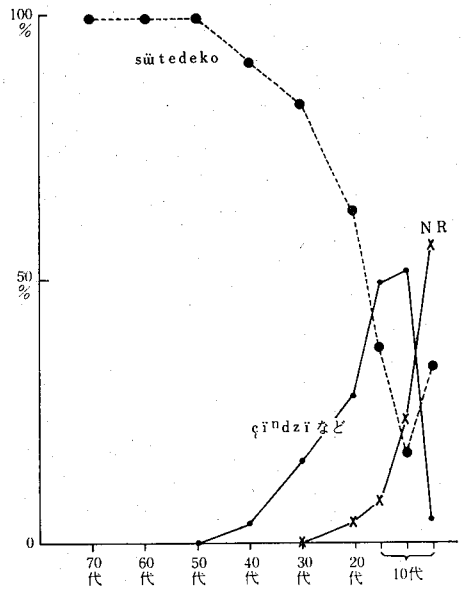
なお「灸」にあたる部分のヤヒは，LAJによれば津軽と連続する。その津軽ではキューの方が都市に進出している。かつて津軽から進出しヤヒが共通語形に消されつつある過程か。

25 額（先端）

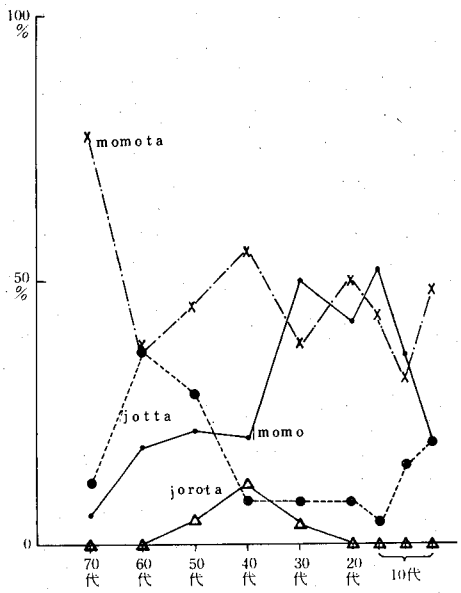



26 肘 〔老〕
| ɸïdzï, ɸɯdzï など
× ɸïdzïtsɯ̈rï など
● sɯ̈tedeko など
△ sɯ̈tembo: など
空白 NR, その他
26 肘 〔若〕
27 太 腿 〔老〕
| momo
— momota
△ jorota
● jotta
27 太 腿 〔若〕
28 太 腿ヨッタ・ヨタ〔老〕
○ ヨッタ・ヨタという
| 〃 いわない
△ ヨロタならいう
28 太 腿ヨッタ・ヨタ〔若〕
2743
2753
2754
2755
2763
2764
2765
2773
2774
2775

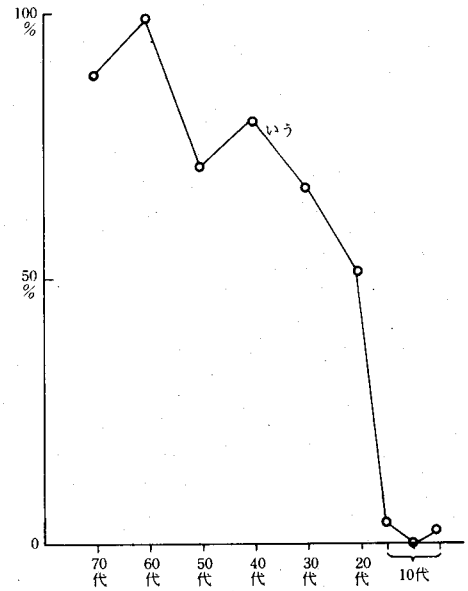
26 肘



27 太　腿



28 太 腿（ヨッタ・ヨタと）



21-2.眉毛

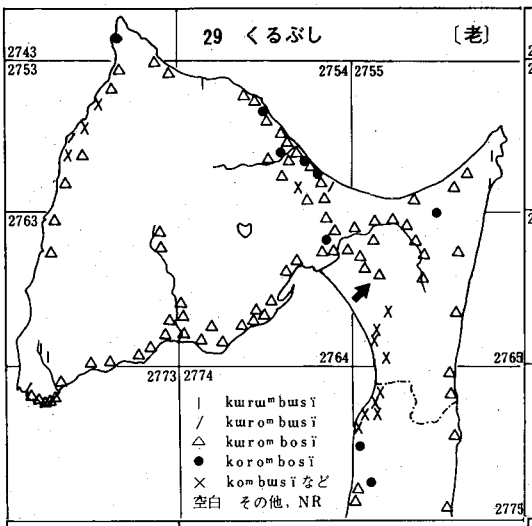
kamïnoke → kaonoke → kanoke
→ majɯɲe

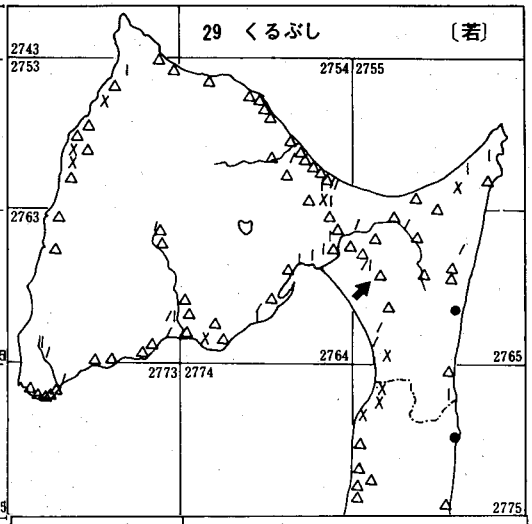
-k- は無声である。かつて有声化の変化が起こった時一語と意識されなかったのだろう。なお調査の場面では，初めマツゲと答え，すぐ「眉毛」に当たる言い方に直すことがよくあった。両者は混同されることがあったらしい。その眉毛をカミノケと呼ぶのは，LAJ111図によれば青森県に点在するのみである。

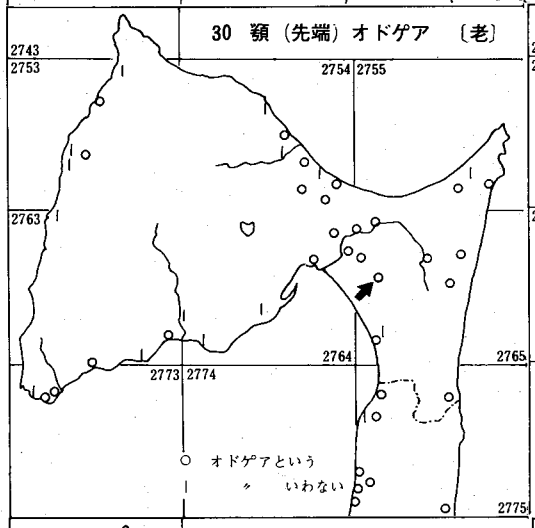
22-2.唇

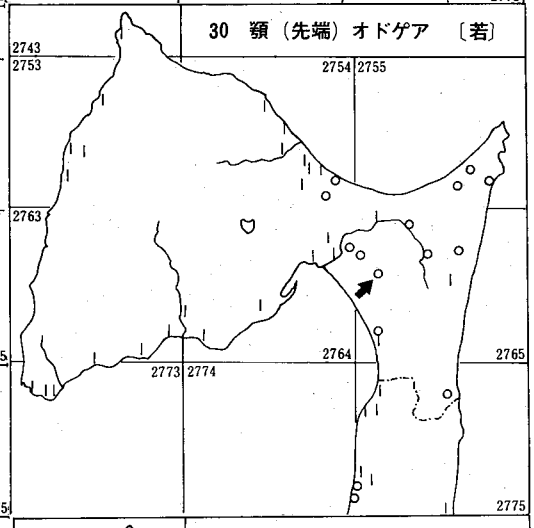
語史を見るには下北の分布図のみでは不十分で，LAJ116図で広い範囲の分布と結びつける必要があった。rï は津軽半島にもあり，古い言い方らしい。-ro はそれより新しいらしい。-rɯ との関係については，ウ段音の歴史参照。

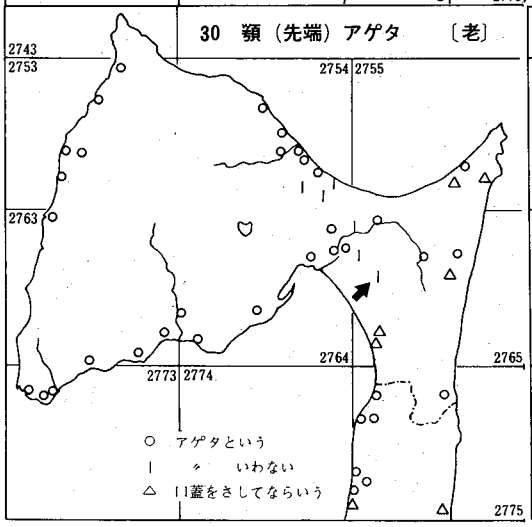
-rï
-ra → -ro → -rɯ

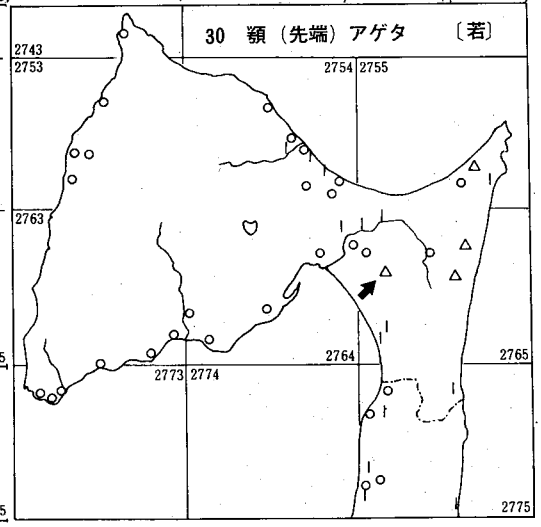

29　くるぶし　〔老〕
2743
2753
2754 2755
2763
2764
2765
2773 2774
2775
| kurumbusï
/ kurombusï
△ kurombosï
● korombosï
× kombusïなど
空白　その他，NR


29　くるぶし　〔若〕
2743
2753
2754 2755
2763
2764
2765
2773 2774
2775

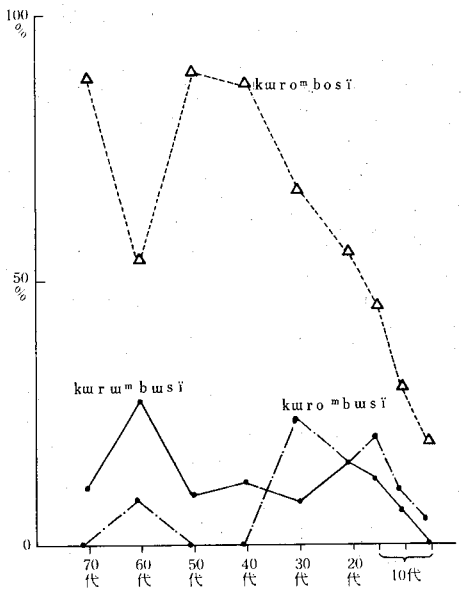

30　額（先端）オドゲア　〔老〕
2743
2753
2754 2755
2763
2764
2765
2773 2774
2775
○　オドゲアという
|　〃　いわない


30　額（先端）オドゲア　〔若〕
2743
2753
2754 2755
2763
2764
2765
2773 2774
2775

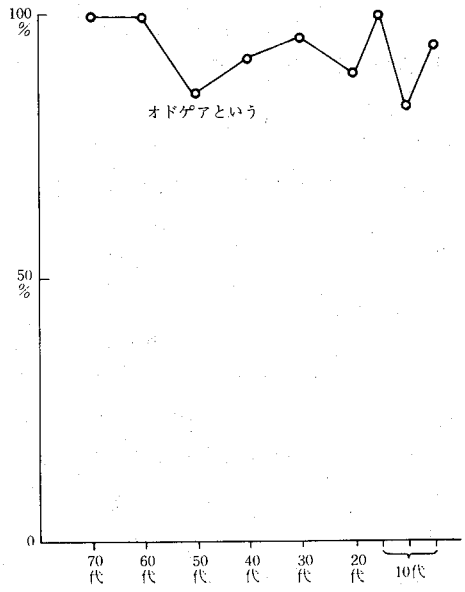

30　額（先端）アゲタ　〔老〕
2743
2753
2754 2755
2763
2764
2765
2773 2774
2775
○　アゲタという
|　〃　いわない
△　川蓋をさしてならいう


30　額（先端）アゲタ　〔若〕
2743
2753
2754 2755
2763
2764
2765
2773 2774
2775

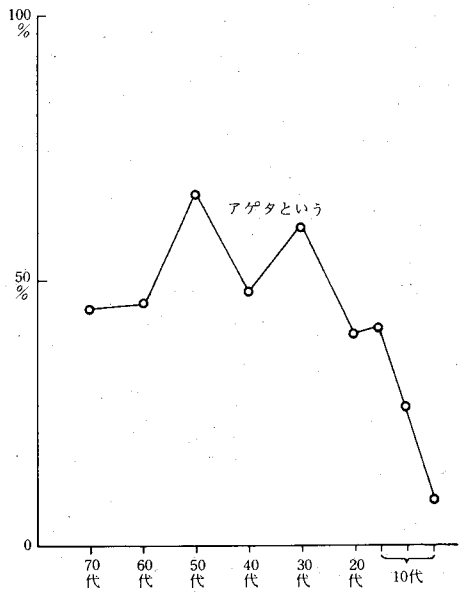
29　くるぶし



30　あご（先端）オドゲア



30　あご（ほおひげの生える所）



23.唇(クチノフクリン)

分布図で老年層にチラホラ見える.クチノフクリンを聞いた項目。これも「猫足」と同様に併存の形で広がり，やがて衰えたのだろう。

24.出っ歯

kïmɯgɯre → soppa → deᵐba → deppa

25.顎（先端）

aŋeta など → aŋo
odeŋɛ → aŋo

詳しくは**30**で後述。

26.肘

語史については，18世紀前半の下北方言を考慮に入れて柴田氏がふれている[10]。

sɯtedeko → Φïⁿdzïtsïrï → Φïⁿdzï
sɯteᵐbo:

10　柴田武〔書評〕村山七郎著「漂流民の言語――ロシアへの漂流民の方言学的貢献――」国語学68集(1967) p.88f.

27.太腿

jotta → jorota → momota → momo

28.太腿(ヨッタ・ヨタ)

理解語としての調査。2年目のみなので不明の地点も多いが，ヨッタ・ヨタという地域はかなり広く連続している。ヨロタは自発的回答のみ。理解語としての分布領域は，もっと広いと思われる。

29.くるぶし

ウ段音の歴史がからむ。規則的な音韻変化だったらKOROBOSIかKURUBUSIしか有り得ないはずだが，様々の中間段階がある。黒星・黒節などの民間語源も働いたのであろう。

OOOI → UOOI → UOUI → UUUI

の順に変ったようである。

なおLAJ128図によればKOBUSIは上北郡に分布する。その南のKUROKOBUSIの上略形として民間語源も働いて生じたものか。もっとも下北西海岸（佐井）にもある。KOBUSIは上田屋のすぐ南まで連続した分布を持つのに上田屋には見られない。

30.顎（理解語）

先端をodoŋɛというのは，**25**とくらべてずっと広い分布領域を持つ。aŋetaと言うかは，分布図の方では先端を調べているのに，上田屋では顎全体（ほおひげの生える所）を調べてしまったため，直接比較できない。顎全体（ほおひげの生える所）は分布図によればほぼ全地点でaŋoなのである。(LAJに比べてNRが少ないのは，質問文を改良したためであろう。LAJでは手振りで区別して示すだけだが，下北方言調査では「ここを何と言いますか。口を大きくあけすぎたのでここが痛いとか言います。（注意：ほおひげの生える所を指す）」と聞いている。)なお上田屋では「上顎（口蓋）のことならaŋetaという」という解答がかなり得られている（川本氏担当のインフォーマント。グラフには示さない。)

「顎全体」「顎の先端」「上顎」の語史を考察しよう。筆者の通信調査(1970年)[11]によれば，上顎は東通村ではアゲタというが，半島西部はNRかウワアゴかである。もし東通の体系が古いとするなら，

顎全体	aŋo	→	aŋo
顎の先端	odoŋɛ		aŋeta
上顎	aŋeta		NR or ɯwaaŋo

→	aŋo
	ɯwaaŋo

と変化したことになる。しかし，最初から三つの意味分野に別の言い方を与えていたのでなく東通村で顎にまつわるいくつかの語形が衝突したために，後に使い分けが生じたとも考えられる。

古谷智子氏調査による「南部と津軽の境界地帯方言地図」[12]によると，顎は津軽側が主にodoŋɛ（山間部にaŋïta），南部側がaŋïtaであって，分布からは aŋïta → odoŋɛ という語史が推定される。下北でodoŋɛがaŋetaより古いとした推定と逆になる。

もしこれに合わせて語史を考えるなら，《かつて顎の先端を下北全体でodoŋɛと言っていた所に，aŋetaがよそから入ってきた。西半では顎の先端をaŋetaと呼び変えたが，東通村などではodoŋɛを温存し，新形aŋetaをそれまで無名だった「上顎」の意味で採用した》となる。LAJでは顎の先端と顎のつけ根の分布はほぼ一致し，どちらの考えが真実に近いのか，今の所不明である。

11　下北地方とその周辺の22の中学校に依頼し，老・壮・若三世代に使用語形を記入してもらったもの。

12　昭和女子大学昭和42年度卒業論文。

3．集落内の年齢差

方言の研究において年齢差を考慮したのには二つの動機があった。まず国立国語研究所の共通語についての一連の調査——社会言語学的研究——である。八丈・白河・鶴岡などで手掛けられた[13]。鶴岡では約20年後における追調査も行なわれ[14]、共通語化の年齢曲線の継時的変化についての重要な知見が得られた。もっともその材料は主に音韻に関するものである点に限界がある。方言に対して共通語の別の音韻体系が接触した場合の考察であり，方言の内部的変化の考察でない点に留意すべきである。

もう一つの動機は，系譜から言えば上の成果が元になっているのであるが，言語地理学における語史の検証にあった。新潟県糸魚川における言語地理学的調査では，梨の木や横地などで集落内の全員調査が行なわれ，年齢差によって語形の新古が判定され，地理的な推定結果と照合された[15]。同じ理由から，老若の複数年齢層での分布調査も企てられた。以下に論ずる下北半島での調査が初期のものである。その後東京付近や長野県，千葉県，更に九州や瀬戸内沿岸などでも複数年齢層の調査が行なわれている[18]。

年齢的変化をもっと詳しく見るために考えられたのが，地理×年齢図（*glottogram*）である。国立国語研究所が糸魚川早川谷で実施したのが早い[19]。その後富山県五箇山のアクセント[20]、小海線沿線の語彙の共通語化[21]についても適用され，筆者も山形県鶴岡市から大鳥にかけて調査を行ない，目下整理中である[22]。この方法は地理的・年齢的変化を細かく観察できる利点があるが，今の所一直線に並べた形の集落についてしかできない。

以上のように二つの動機から，日本での言語の年齢差に関する研究が進んだが，言語変化ことに音韻変化について考えるにも，年齢差は重要な意味を持つ。「言語年齢学」なる分野が確立されてもいい位である。

さて，上田屋の年齢層別のグラフによれば，集落内の年齢差はかなり激しい。年齢差のはっきり出そうな項目を取り上げたせいもあろうが，老若で全く入れ代った例もある。これを三つの観点から眺めてみよう。

まず**第一の観点**として，増加・減少している語形が共通語・標準語とどんな関係にあるかを見る。

馬瀬氏によれば次の四つの類型に分けられる[23]。

1．里言から標準語へ
2．里言がそのまま残る場合
3．里言が他の里言と交替する場合
4．標準語化に逆行する場合

他に，5として標準語（と一致するもの）がそ

13　江川清「地域社会の言語生活研究小史」(『新・日本語講座5，日本人の言語生活』(汐文社1975) pp.23－40）が概観に便利。

14　国立国語研究所『地域社会の言語生活——鶴岡における20年前との比較——』(秀英出版，1974)

15　W.A.グロータース「言語と地域社会」(『NHK市民大学厳書31pp.141－167)，その他。

18　三石泰子「言語地図集の目録」言語生活284号(1975) pp.50－56）で検索できる。

19　徳川宗賢他「語の盛衰——糸魚川早川谷における等語線の動態——」国語学会研究発表要旨（1969年5月)。

20　真田信治「富山県利賀谷におけるアクセントの動態——2拍名詞第2・3類を主として——」文芸研究68集（1971）pp.39－49.

21　永瀬治郎「方言から標準語へ——千曲川上流における標準語化調査——」月刊言語3－7（1974) pp.18－28.

22　一部は「地理的伝播の調査規模」国語学101集（1975）pp.17－28に発表（p.18)。他に「『呉れる』の語形変化過程」山形方言12号（1975)。

23　馬瀬良雄「言語変化の類型」信濃（1963.4) pp.16－28，加筆したものが，次に所収。
馬瀬良雄『信州の方言』(第一法規，1971) pp.245－265.

のまま残る場合もあげられよう。2と5は共に年齢変化がない場合，1・3・4が変化がある場合である。(なお，6として，ある標準語形から別の標準語形へ変化する場合が考えられる。デンデンムシ→カタツムリ，ツバキ→ツバ，バレーショ→ジャガイモなどがこれに当たろうか。もっとも両形とも「標準語」と見るのは用語上おかしい。「共通語」から「別の共通語」へだったら当てはまる。[24])

さて，上田屋での年齢変化の大部分は，タイプ1つまり「共通語化」である。語彙の共通語化の進行が一時点における年齢差の形で反映されている。一方，タイプ3の他の里言と交替する例も少数ながら見つかる。6.おおばこにおけるツナパリ，10.くすぐったいにおけるモチョカリのほか，7.しおでにおけるシュンデコもこれに当たる。これを「地方共通語化」と呼ぶことも考えられる（徳川氏は「地方標準語」なる用語を用いている[25]）が，ツナパリ，モチョカリはごく狭い地域だけに行なわれている言い方であり，「共通語」とは言えない。むしろ「新方言化」と呼ぶべきだろう。

タイプ4の標準語に逆行する変化は，語彙では見当らなかった。母音体系における老年層の/i/〔ï〕→中年層の/e/〔ę〕の移行がこの変化に当たるだろう。/u/→/o/もこれに当たるが，共に共通語に近づく再変化を起こしている。語彙の場合，他の調査項目を取り上げれば見つかるだろうが。

タイプ2（里言の残存）も，この調査では見つからない。8.あさつきがこれにやや近い。そもそも年齢差のありそうな項目を選んだせいである。後述のように，分布調査で上田屋付近が老若ともにべったり同じ語形であるような項目を選べば，このタイプが続出したであろう。

第2の観点として，年齢的変化の緩急によっても分類できる。加藤信昭氏は（集落内に言語差のある項目を）変化のはっきりした「なだれ型」と，はっきりしない「共存型」とに分類した。[26] 上田屋についてもこの分類が可能であるが更に細分することもできる。まず**「なだれ型」**は共通語流入の年齢を考慮して，三分できる。

(1)先発型（70代・60代ですでに共通語化が進み，30代・20代で完成間近になっているもの）4.蠅，18.煙管，19.糠，20.手拭，22-2.唇，24.出っ歯などがこれに入る。

(2)入れ代わり型（70代・60代で0％に近く，20代・10代で100％近くになっている，変化の急なもの）1.おたまじゃくし，2.蛙，3.蝸牛，9.まぶしい，11.蜘蛛(語形）のほか21-2.眉毛がこれに入りそうである。

(3)後発型（老人は里言を多用し，40代前後からやっと新形が増え始めるもの）25.顎(先端)，26.肘がこれに当たり，また新方言化の6.おおばこ，10.くすぐったいも偶然だろうがこのタイプであり，しかもかなり急なカーブを示す。なお母音の共通語的発音/i/〔i〕もこれに入る。

以上の三分類は要するに新形の広がり始めた時期にかなり密接に対応するものであり，言うまでもないが，連続的なものである。言語習得はいわゆる言語形成期以降も一生続くものであるから，今の50代の人から共通語形を使い始めているから50年前にその語の共通語化が始まったとは，推論できないが，一応この三分類から各語の共通語化開始の大体の時期を推測する役には立つ。

加藤氏の**「共存型」**は，上田屋でもほぼその

24　共通語形と考えられるものが二つ以上ある例については次を参照。
井上史雄「学生の方言」(『野田寿雄教授退官記念論文集』(刊行準備中))

25　徳川宗賢「言語地理学調査における質問と答え」国語学69集（1967）pp.57－65.

26　加藤信昭「地域社会とことばの変化」(『新・日本語講座10　ことばと文化・社会，（汐文社1975）pp.135－162）p.160.

まま適用できる。年齢差が非常にゆるやかなものである。27.腿，29.くるぶし，21.曽孫(語形)，および16.井戸，11.蜘蛛のアクセントである。なお，年齢毎のジグザグの激しい7.しおでと，22.(灸を)すえるは，**「迷走型」**とでも名づけ得るかもしれない。ただ言語の実態を示すのか調査誤差なのか，不明である。

このほかに，集落内に言語差の認められない**「無変化型」**も考えられる。5.げんのしょうこ，8.あさつき，23.唇，30.顎は，「共存型」と無変化型の中間的存在である。(5・23・30が理解語の調査であること，8ではシロ類とアサツキ類の併用が多いことは，何か意味があるかもしれない。)また頭高アクセントの大部分も，無変化型と称した方がよい。

さて「共存型」と「なだれ型」の区別は，実際には連続的なもので様々の中間段階が有り得るが，この区別は言語変化のタイプに対応する。つまり変化の急なものとゆっくり進むものである。上田屋のわずかな項目で見ての推論だが，これは単語の性格と関係がありそうである。幼い時には余り使われないような単語，つまりかなり成長してから本格的に覚える単語は「共存型」を示すようである。逆に幼い時から(しかも同じ年頃の遊び仲間 ── peer group ──の中などで)盛んに使われる単語は「なだれ型」を示すことが多いようである。

なお加藤信昭氏によれば，徳島県内でも徳島市と木頭村は「なだれ型」を示すことが多く，東祖谷山村は「共存型」を示すことが多いそうである。氏は住民の「伝承性の強さ」による説明を試みておられる。確かに方言(とそれが反映する文化)に対する心理的態度の影響は大きいが，しかしその外に，住民の間のコミュニケーション構造に注目すべきではなかろうか。地域集団の規模が小さく，必然的に離れた年齢層間のコミュニケーションが大きくなるような社会と，人口規模が大きいため日常の交際集団がほぼ同じ年齢に限られるような社会とでは，言語変化の速度に違いの出ることが予想される。比較研究が望まれる。

言語の年齢差を**第3の観点**から考察しよう。共通語化・新方言化の増加の線を見ると(里言の減少の線を見ても)，直線にはなっていない。まず70代が60代よりも新形を使う例がかなり見られ，10代の前半が後半よりも新形を使わない例も多く見つかる。つまり，(斜に倒した)S型のカーブを描く。

典型的なS型カーブは21-2.眉毛に見られる。他に，3.蝸牛，10.くすぐったい，11.蜘蛛，20.手拭，22-2.唇，がある。17.胃の〔e〕もこれに入る。

老人層・若年層のみでカーブが反転している不完全S型なら，他の多くの項目に見られる(若年層における不完全なS型には，18.煙管，19.糠のようにNRの増加によるものもある。)

このS型カーブは，調査誤差なのか，実態を示すのか。まず老年層については，70代のサンプルが9人，60代のサンプルが11人のため，たった一人か二人の偏った答に影響された可能性がある。また，老人は調査という場面に慣れていないため，普段より改まった答を出してしまった可能性がある。(岩手県雫石付近における東大の第一年度〈1973年〉の調査で，老・壮・若三世代の分布を比較して，老よりも壮の方が方言的な答を多く出した項目がいくつかあった。実際の言語状況を示しているのかも知れないが，調査への場なれ，あるいは「サービス精神」[27]の要素も考慮された。)しかしまた，「言葉が悪いと言って孫たちに直される」とか「孫達のために，方言を使わないように気をつけている」という事もよく老人が口にする。音韻体系と違って置き代えのやさしい語彙の場合には老いてからの共通語化も十分起こり得ることである。

27　注14の文献の各所。

S型カーブの10代の部分については，まずサンプル数が24名，46名，35名とかなりの数だから，特殊な個人の組織的な影響とは考えにくい。年少の者が調査へのサービス精神から方言を多く答えたとも思えない。ただ小学生のうち幾人かは，広場で遊んでいるのをつかまえて聞いたため，普段の言葉が多く出たとも考えられる（しかし他の者にしても多くは家の中のくつろいだ場面で調査している。）

10代におけるカーブの反転の主原因は「**共通語化のおくれ**」に求められるべきだろう。幼児の最初に覚える言葉は養育者のそれであり，続いて遊び仲間のそれである。保育所・幼稚園の普及していなかった当時において，学齢期以前の子供達の共通語化が余り進んでいなかったことは想像に難くない。小学校以降新たに共通語形を習得する道程をたどったであろう。また10代後半には高校に入学して田名部に通う者も出てくる。これらが，共通語のピークのずれ，カーブの反転をもたらしたと思われる。これまでの言語調査では，調査実施上の困難を慮って，せいぜい10代後半以上を対象とすることが多く，年齢層区分もそう細かくなかったために，はっきり現われなかったのだろう。もっとも共通語的発音や敬語の使いわけの能力で20代・30代がピークをなすことは，鶴岡や岡崎の調査で知られていたことである。[28]

この「共通語化のおくれ」も単語によってピークが違うようである。蛙・おたまじゃくし・かたつむり・おおばこなどはS型カーブを見せないか，10代なかばにわずかなピークを見せる位なのだが，これらは幼い子供達の間で多用される語である。これに対し，煙管や糠などではNRがかなり多く，全員が使用するに至る年齢がかなり上である。

S型カーブを描くか描かないか，ピークはどこにできるかという問題は，その単語を習得する時期，多用される時期と関係がありそうである。これはまた多用される集団の大きさ，公の場面での使用頻度などとからんで，方言量の多さとも関連しよう。[29] 幼い時に狭い集団で多用され，その後は余り口にされないような単語は，様々の語形を生み出しやすいし，また陶汰しあうことも少ない。

しかし，この調査ではわずか30項目余しか扱っていないし，それも下北半島の中，ことに上田屋付近で地域差のある項目だけである。もっと様々の材料で検討する必要がある。

以上集落内の年齢差について考慮した。集落内に明らかな年齢差が存在すること，たとえ一集落の一年齢層だけを取り上げても言葉が100%一致するわけではない，ということに注目しておこう。ことに変化の過渡期に当たる年代では新古両形の勢力が相半ばし，ますます均一性を欠く。他の社会条件を考慮に入れても，言語外の条件からどの語形を使うかを予測するのは不可能である。この問題については後述しよう。

なお，以上の上田屋の共通語形の年齢カーブを総合すると，30代から50代にかけてがちょうで共通語化の過渡期に当たり，カーブが急で，同年齢層内の言語的統一もとれていない。しかし，これが（調査時の30年から50年前に）一斉に進行した共通語化のせいだとは即断できない。時代的に言えば納得のいく年代ではあるが，調査項目に偏りがある。上田屋付近で老・若の差が歴然と現われるような現象ばかり採用しているからである。

28　野元菊雄「年齢階層と言語」(注26と同書, pp.163−188)

29　「日常基本語藻」についての荘内地方の分布調査では，そう多くの地域差が出なかった。次を参照。国立国語研究所『地域社会の言語生活——鶴岡における実態調査——』(秀英出版，1953) p.228f.

4．地域差と年齢差

今度は上田屋内部の年齢変化と下北半島全体の分布の変化を照合しつつ考察しよう。

地域差をもとにして言語史を再構成するのが典型的な言語地理学の方法であるが，常に意味のある分布を示すとは限らないこと，分布パターン（たとえば周圏分布）が必ずしも新古に対応しないこと，変化の絶対年代が分からないこと，などの限界があった[30]。しかるに上田屋の年齢差の考察によれば，共存型のいくつかと無変化型を除けば，(主要な語形については）いずれも新古関係を知ることができたし，また変化開始の年代についても（先発型・入れ代わり型・後発型などに分けて）ある程度推定ができた。

得られた新古の推定（および新古不明の項目）について，下北半島の老若の分布図とつき合わせてみよう。大要においては年齢別グラフも分布図もほぼ同じ変化方向を示すが，細かい類型としては一致しない。上田屋の中で入れ代わっていても下北半島全体では大して変わっていないこともある。もし一集落内の年齢差がある地域全体の言語史と一致するならば，分布調査を行なう必要はないことになるが，実際はそうではない。

(a) まず下北分布図には出て来るのに**上田屋（の生え抜き）では出て来ない語形**がある。2蛙の gɛ:ro, 4蝿の aᵐbɯ, 6おおばこのΦɯto-tʃako や～kïrï 系の多数の語形，10くすぐったいの -kotʃoe, -katsï, -kasï，18煙管の-rï で終る形，21曽孫のhe-,22灸をすえるのjaçï, -sɯrɯ, 21-2眉毛の kamïnoke, kaonoke, 22-2唇の -ra で終る形，24出っ歯の soppa, 25顎（先端）のaŋeta, aŋïta など，26肘のΦïdzï -tsïrï など，29くるぶしの kobɯsï などである。このほかに1，2地点でしか出なかった語形を数えあげればきりがない。半島西半（ことに西海岸）の語形が上田屋に現われないことが多く，また南の方，上北郡の語形も出ないことがある。印象的なのは，6おおばこのΦɯto-ʃako，29くるぶしのkoᵐbɯsïが，共に上北郡から上田屋のすぐ南の集落(二又)まで連続して分布しているのに上田屋では得られなかったことである。二又と上田屋の間には直接の交通路はないから，二集落の間には *all or nothing* の截然たる等語線が引けそうである。しかし上田屋と田名部町との間や上田屋の東の集落との間にはそのような截然と分ける等語線はそう無いようである（後述)。

こうして見ると，上田屋における年齢変化は，厳密には東通村西部のごく狭い範囲の言語状況しか反映しない。従って，たった一地点の全員（またはサンプル）調査から地域全体の言語を推測するのはかなり危険であり，取りこぼしが多くなる。

上とは逆に，(b)下北半島の老若の分布図では現われなかったのに，**上田屋のみで現われる語形**がある。6おおばこの YUBIKIRI 類の一つ，ïᵐbïkïrï である。

なお，6おおばこのtsïnaparïは，上田屋の10代で増えている語形なのに，老・若の分布図では少し離れた所にしか見当らない。隣接集落ではどうなっているのだろうか。「各集落間には最低一本の等語線が必ず引かれる」というテーゼはどの程度妥当するのだろうか。

(c) 以上で，上田屋の年齢差が下北半島全体の言語史を反映するものではないことを見たが，老若の分布図における上田屋付近の地域での変化パターンと照合して見よう。前述の「なだれ型」(の三分類）や共存型・無変化型などの分類を念頭において比較すると，旧田名部町の西で上田屋の北や東にあたる地域（東北端は除く）の集落での分布の変化は，（おおばこなどの特殊例を除き）かなりよく上田屋と一致するよう

30 加藤正信「国語史と言語地理学――『蜻蛉』を例として――」文学・語学66号（1973）pp.61－74.

である。老・若二年齢層しか取り上げていないのだが，これらの集落では上田屋とそう変らない年齢パターンで変化が進行していると思われる。

このことから逆に，次のような言明が可能になる：「下北半島全体で全く同一の時期に全く同一のペースで進んでいるような言語変化はない」。つまり全国共通語化にしても，この下北半島位の広さの地域の中では進み方に地域差がある。これを一種の伝播と見るならば，「一集落の中の40～60年位の違いで語形が入れ代わるような急激な共通語化も，地理的伝播の速度はそう早くない」ということになる。少くとも下北半島では全域一斉に老→若で語形が入れ代わるような変化は見られなかった[31]（東大の岩手県雫石町での老・壮・若三世代の分布調査でも全域入れ代わり型の語は見られず，ツララ・オタマジャクシなど少数の例がそれに近かっただけであった[32]。ただ『瀬戸内海言語図巻』[33]では，いくつかの項目でかなり広い地域で老人→中学生で語形が入れ代わった例が見られるし，東京付近や長野県のアクセントにも全域一斉の変化が見られる。項目や地域により違うらしい。

全国一斉に進みがちな「共通語化」と，各地域における「地理的伝播」とは，必ずしも同じメカニズムによって起りはしない。しかし共通語化についてさえ上述のような地域差がありうることは，語形の伝播の速度についても，かなり重要な示唆を与えるものである。

(d)　上田屋の集落内の年齢差からは不明だったのに，**地域全体の年齢差によって**語史の推定ができる場合もある。たとえば8あさつきの二形の関係は，上田屋では共存型（あるいは無変化型）のため，不明だったが，老若の分布を比較するとasadogïの方が分布地域を狭めている所から，asadzɯgï が新形と推定できる。また21曽孫のヒコとヒコマゴの関係も，分布図によってヒコマゴの退縮が知られる。22（灸を）すえるも上田屋のグラフはジグザグだが，分布図によればtaderɯが退縮している。同じく迷走型の7しおでも，ʃɯ̃deko の進出が分布図では明瞭である。

以上のように，一集落内の年齢差は，歴史の推定においてそう万能ではない。ただこれは，下北半島では老若二層の分布を調べたために，言えるのかも知れない。もし老年層だけしか調べていなかったとしたら，その**地理的分布のみから新古を推定すること**は可能だったろうか？

ことに下北半島の場合は海も交通路として働いているために漁業集落は閉鎖性と開放性の二面を持ち，どこが「辺境」であるかの判定が難しく，どことどこが相互に交渉のない地域なのかもよくわからない。同じ困難は島の場合にも生ずるであろう。

下北の場合，老若の年齢分布を比較して，東通村が多くの古形を保存する地域であることが知られた。ここに扱った約30項目のみならず，分布調査で取り上げた多くの項目において，東通村に分布する語形はほぼ下北地区での古形と見てよい。

ところがそのような分布パターンによる推定と，上田屋の年齢変化が一致しない項目がある。10くすぐったいである[34]。分布図によれば-karï

31　下北半島における分布のパターンについては，『下北』p.185ffを見られたい。むつ市（旧田名部町＋旧大湊町）の言語的威光はさして大きくないらしく，新語形の放射中心としての働きはほとんど見られなかった。むしろ各町村の役場所在地付近の集落（のインフォーマント）に全国共通語形がやや早く受け入れられる傾向が目立つ。

32　大川ますみ「岩手県雫石方言における地域差と場面差」日本方言研究会発表原稿集18(1974)pp.23－31.

33　藤原与一『瀬戸内海言語図巻（1・2）』（東京大学出版会，1974）

34　井上史雄「言語地理学の限界」日本方言研究会発表原稿集12（1971）のp.87f.でもふれてある。

の分布パターンはまさに東通村の古形である。そして-koeはむつ市からの交通路ぞいに分布し，新形と見られる。ところが，上田屋の年齢変化によれば-koeが古く，-karï は最近広がった形である。上田屋のみで -karï を古形と知らずに使い始めたとも考えうるが，上田屋はそれほど周囲から隔絶した集落ではない。

老若の分布図を対比しよう。-karïは若年層の分布図でも衰えを見せないのみならず，かえってむつ市内と鉄道ぞいに北の方に，分布領域を広げている。-koeから-karï への年齢変化を起している集落は上田屋以外にもありそうである。

この語史については，下北半島西南端で一人が「モチョカユイ」と答えていること（地図では省略）および東通村でモチョカリを答えた一人が「カリとは痒いことだ」と答えたことが重要なヒントになる。1970年の通信調査によれば，「痒い」を，青森県の旧南部領（下北半島を含む）ではカリと言い，旧津軽領ではカイという（なお「軽い」は全県でカルコエ（一部カルエ）で「痒い」と区別される。)[35]従ってモチョカリと言う地点ではすべて《痒い》という民間語源を持ち得る。

LAJ82図によれば，-カリなる要素を持つのは下北半島だけである。これらから，下北半島で民間語源をきっかけとして独自に生まれた形と思われる。[36] その前身は現在もカリの外側に分布する-カシであろう。

なお老若の分布図を比較すると，西端では-カチをつぶして-カシが進出している。-カシ自体もかなり生命力を持った語形らしいが，-コエよりは古い言い方らしい。所が-カシから生まれた-カリは，その-コエの領域にも踏み込んでいる。モチョカリは，よほど良い民間語源と感じられたのだろう。

くすぐったいは，民間語源によって発生した非常に特殊な例であるが，地理的分布の一般的パターンを利用して語史を再構することへの警鐘である。[37] この場合単なる一年齢層の分布図からは，全く逆の推定を下していたであろう。二年齢層の分布図を比較しても，モチョカリが新しいとは断定できなかった。一集落内の年齢差が初めて確実な証拠となったのである。

こうして見ると，一集落内の年齢差とある地域全体の年齢差とは，互いに補い合う情報を提供するようである。(この両方の情報を組み合わせて言語変化を考察しようというのが「地理×年齢図」(glottogram)である。)

5．インフォーマントの性格

集落内の言語差を考慮した上での，言語地理学的調査におけるインフォーマントの性格は，糸魚川地区の横地について柴田武氏が検討しておられる(注37の文献。)

多少異った方法で検討してみたい。

まず，分布調査で上田屋代表となった老川氏（明治30年生れ，当時67歳）と若松氏（昭和17年生れ，当時22歳)[文中仮名。共に教育委員会の紹介による]が，上田屋の同年齢層で最も普通に使われていた形を答えていたかを見よう。まず老川氏の答えた33項目のうち，25項目（75.8%）は60代の多数形である。4項目は新し過ぎる（もっと若い層で多い。）3項目は古過ぎる（かつては上田屋でも使われた語形である。）NRが1項目あった。しかし，方言形を出さず

35　注11参照。注34の文献に分布図を載せてある。

36　-karïが独自に発生したであろうことは，上田屋全員調査についての口頭発表（都立大学方言学会，1966年6月）の際，グロータース神父が示唆された考えである。

37　柴田武『言語地理学の方法』(筑摩書房，1969）でも「他の語の地理的分布」による分布の一般的パターンは，「あまり使えないものであるし，あてにしないほうが賢明だとさえ言える」(p.40）としておられる。

に共通語形を答えようという傾向は見られない。一方若代表若松氏が20代の多数形を答えたのは，33項目中15項目（45.5%）である。新し過ぎる語形を答えたのが３項目，20代にしては古過ぎる語形を答えたのが13項目に及ぶ。NRは２項目である。共通語を使おうとするのではなく，むしろ「サービス精神」からか，20代の青年の余り使わない形を教えてくれたとも思われる。（若松氏が20代の青年の中でもことに古めかしい言葉，方言を使うタイプに属していたのかもしれない。いわゆる方言調査には有難いインフォーマントだが，ただ一人の若年層代表としては偏っていると言える。）

今度はこの33項目について老川氏と若松氏の回答を比べると，同じ語形が18項目，若松氏の方が新しいのが11項目，若松氏の方が古いのが３項目(9.1%）あった。(他に若松氏のみNRが１項目。)上田屋の年齢変化のグラフを見ると大部分の項目で60代と20代の語形の大勢が入れ代わっているから，若松氏は新しい形をもっと答えていいはずである。

たった一組だけ老若の代表を取り上げて新古を推定すると誤まることがあることを示す。同じことは，下北半島分布図の老・若の答を集落毎に重ね合わせてもわかる。語史としてはA→Bなのに，老がB，若がAを答えている集落はほとんどどの地図にも見られる。上田屋では若年層が古い形を答える傾きがあったが，逆に老人が新しい形を答えたがる場合もある。一般の言語調査でも，たった一人か二人をインフォーマントとして記述する時には用心が必要である。基礎語彙統計学的調査などでは，数字が狂う恐れがある。

また老川氏の答えた古過ぎる形と若松氏の答えた新しい形の二，三は，上田屋の221人の調査でもほんの数人しか答えなかった稀な語形である。この点でもインフォーマントの答は批判しつつ処理することが必要である。

それでは，その集落のその年齢層の代表的な形をいつも答えてくれるような理想的インフォーマントは存在するだろうか。上田屋の調査結果を老・壮・若・幼の四つの年齢層に分け，各年齢層で66.7%以上を占める語形（以下「最多形」と呼ぶ）についてのみ考察しよう。該当項目で最多形だけを答えた人数は，以下の通りである。

	最多形を持つ項目数	理想的インフォーマント	総人数	%
老(明19～明38生)	19	1名	20名	5.0
壮(明39～大14生)	18	2〃	46〃	4.3
若(昭１～昭20生)	15	1〃	50〃	2.0
幼(昭21～昭30生)	20	4〃	105〃	3.8

以上のように，その年齢層の2/3以上の人が答えている形だけを出した人は，各年齢層とも５%以下である。前述のように上田屋で調査した33項目の大部分は，老→若の変化の著しい項目である。その過渡期に当たる若年層は，最多形を持つ項目数も少ないが，他方答の一致も少なく，わずか１名しか理想的な答を出していない。これらのわずか５%以下のインフォーマントも，「理想的」なのは最多形の存在する項目についてだけであって，最多形のない項目については，稀な語形を答えているかもしれない。

試みに今度は各年齢層で50%以上に達した語形について同じように集計すると，いずれの年齢層でも，すべて50%以上の語形のみを答えたようなインフォーマントは，居ない。

以上，集落・年齢層の大勢をただ一人で代表してくれるような理想的なインフォーマントは居ないことが，明らかになった。答の扱いに注意が必要な所以だが，これは集落内の差の激しそうな33項目についての結果である。もっと他の項目も混えていれば，一人当りの「理想的な答」の割合は多くなる。

しかしまた，同じインフォーマントに同じ質問をしても，別の機会には別の答を出すことも

ある。(調査票を一通り答えてもらったすぐ後に続いて最初からまた答えてもらった場合も，同じ答を出さない。[38]) ナゾナゾ式の質問票形式では現われにくい為にとかく見逃されるが，実際は一個人内の併用がかなり多いという事実に基く。語形を与えた上で使うかどうかを聞く「理解語[39]」としての調査では，使う人数が多くなり，分布地域も広くなる。(22-2と23の唇，25と30の顎について，一集落内の年齢差および分布地域の広狭を比較されたい。) 一方が共通語形に属する場合は，ことに併用が多い。場面によって使いわけうるからである。[40]

このように，知っていても調査の場面で出ない語形もあるわけだから，得られた答の扱いには注意が必要である。

6．集落間の言語差

一集落内の一年齢層内においても言語差の甚だしいことが，全員調査によってわかった。そして分布調査でただ一人のインフォーマントを取り上げた場合には，その答のすべてがその集落・年齢層の大勢を反映しているわけではない（ましてや，全員そろってその語形を使っているとは限らない）こともわかった。どの答が多数形に当たり，どの答が稀な語形なのかは，その個人を見ているだけでは判定できない。ましてや数集落に一人とか一町村に一人位しか取り上げない場合は，地域全体の状況についてはほとんど何も言えないかに思える。と言って，その集落・その地域の言語状況を詳しく知ろうとするなら，結局そのための相当規模の調査を企画する必要がある。

しかし我々は地図上の分布を見る時すでに抽象して見ているのであって，ある地域内でべったり同じ答が得られた時は，その地域・その年齢層についてはほとんど内部差がなかろうと，推定している。[41] 実際下北半島の分布図と上田屋全員調査の結果をつき合わせて検討しても，前述の通り，上田屋周辺の地域に関しては，地理的分布状況と集落内の状況は密接に対応していた。一地域がそろって同じ答の時はその中の集落のその年齢層での差が少ないだろうという推論は，事実によって裏付けされたわけである。

しかし分布領域の縁辺にある地点や，分布がバラバラな時は用心が必要である。上田屋でもそのような場合は年齢層内の言語差が激しい（二つの語形が混在している)。このような場合は，少し条件が違えば別の答が出る可能性がある。集落間の言語差が少なく，語形の普及の度合が少し違うだけという場合もあろう。等語線の位置も（従って分布領域も）条件次第で，浮動的でありうる。

「国語学」101集では，「境界付近の微細な現象をもとにした言語地理学的推定は往々にして危険である」(P.17) と述べた。地図の例えを用いれば，等高線の走っている所に必ずしも崖がないこと，低い崖が地図上に示されるかどうかは，その標高に左右されること（高い崖ならどんな場合でも地図の等高線として出て来る），を挙げることができよう。

糸魚川では「薬指」を２回尋ねている。柴田氏 (1969)[42]の図1•3-4と1•3-5を比べると，ben(i)saʃi(jubi) が西端・北端に一地点あるかないかで，随分地図の印象が違って来る。飛び離れた一地点からの情報を重視するかどうかで，

38　糸魚川早川谷におけるガ行子音に関する筆者の調査による。

39　むしろ「想起語」と呼ぶべきか。

40　注32および以下の文献。
佐藤亮一「地域差と場面差――熊本県球摩川沿岸地域における――」日本方言研究会発表原稿集19 (1974) pp.54－63.

41　徳川宗賢「方言の地理的分布――特に分布の内容について――」(大石初太郎・上村幸雄編『方言と標準語――日本語方言学概説――』，筑摩書房，1975, pp.129－154) のp.132 f.参照。

42　注37の文献。

新古の推定も違ってくる。

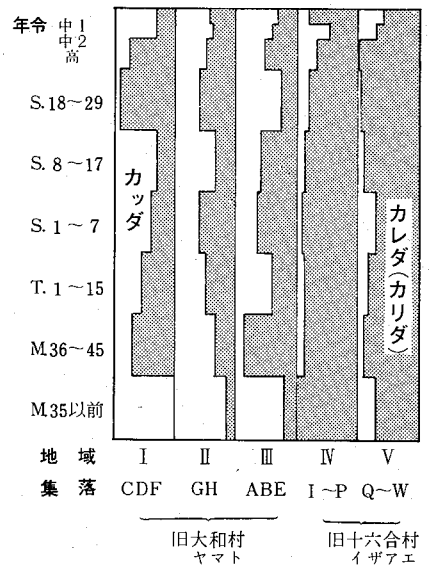
以上，得られた答の不安定性を述べた。それでは，ある集落ではほぼ全員が使うのに隣の集落では一人も使わないような，截然たる等語線はあるだろうか。

先に，6おおばこのフトチャコ、29くるぶしのコブシが，上田屋のすぐ南の集落まで老若とも連続した分布を示しているのに，上田屋では全く使われていない事実を指摘した。類例は7しおでのso^{n}deko（上田屋の中にも数名の答あり）24出っ歯のsoppa（上田屋を囲むように分布しているのに，上田屋ではゼロ）26肘のΦï-dzïtsïrï（同様）などである。直接交通路で結ばれない集落間には，相互に完全に異なる語形のみを使う截然たる等語線を引き得る場合がある。しかし直接交通路で結ばれ，しかも学区[43]も同じという集落間ではどうであろうか。

くり返し調査における答の安定度（分布領域の一致度）に関する徳川氏の論文[44]によれば，「俚言・地方標準語形・標準語形」の順に一致度が低くなる。上記おおばこ・くるぶし・しおで・出っ歯・肘はすべて．俚言（またはかつての地方標準語形？）の例に当たる。標準語形の場合は，上田屋の年齢差・上田屋付近の地理的分布パターン，更に同一個人内の併用の可能性から言って，集落間の差は（たとえ交通路で結ばれない所でも）そう大きくはないと思われる。崖ではなくなだらかな傾斜が続く形の，連続的な言語差があるのだろう[45]。

集落間の言語差は，地理×年齢図によってもうかがうことができる[46]。少なくとも明瞭なタテの等語線が貫かれる場合は，*all or nothing* の等語線が存在すると考えてよい。筆者の鶴岡市内から朝日村大鳥にかけての調査でもこのようなタテの等語線はいくつか見つかった。しかしいくつかの境界に集中する傾向があり，全集落間にはまだ見つかっていない。年齢を限れば全集落間に見つかるが，それが *all or nothing* の等語線なのかの判定が難かしい。一年齢層のインフォーマントを複数にすることが必要であり，理想としては隣接集落間での全員調査（少くともサンプル調査）が望まれる。東大の岩手県雫石町西山における調査の結果は目下整理中である。

予備的な調査として，ある中学校の全生徒・全父兄のアンケート調査に基く資料がある。山形県荘内地方の分布調査により，重要な文法的・語彙的等語線が走っていると思われる余目町和合中学校で行なったものである。各集落で生育した「生え抜き」のみを取り出すと，次の一例のように，かなりはっきり地域差が現われる例もある。



43　馬瀬良雄「学区と方言」国語学77号（1969）pp.1－21.

鏡味明克「等語線と学区の関係の地域的条件」国語学会昭和49年秋季大会要旨（1974）pp.25－31.

44　注25の文献。

45　注37の文献p.53に同じ考えが図式化して説明されている。

46　注22の文献の記述と重なる点がある。

この「枯れた」の場合は明35年以前に生まれた者（70才以上）の差が大きい。しかし他の年齢層ではそれ程大きい差は見られない。

昭29年12月に両村が余目町に合併して以降の言語的混合も考えられるが，この平野の真只中の地域では相互の通婚や行き来も多かったのであろう。

集落間の言語差を作りあげ，保つのは，まず相互のコミュニケーションの多少であり，また相互の社会心理的態度[47]である。

集落間の言語差の問題は，新しい語形が地域社会に流入・伝播する過程を見るにも重要な意味を持つ。教室その他においては，ある言語ボスが新語を導入し他のメンバーに採用させる過程も考えうるが，集落内ではどうだろうか。言語の伝播は，「隣組の伝達方式」のようなものか，「急行列車」のようなものか。[48]

この稿では集落内の言語差に重点を置いた。集落間の言語差については，別の資料も使ってもう一度考えてみたい。

下北半島の分布調査および上田屋の全員調査は，九学会連合下北調査の際に言語学Ｂ班（柴田武・加藤正信・加藤貞子・川本栄一郎・(２年目のみ) 井上史雄）が行なったものである。資料の使用と掲載を快諾して頂いた。

末筆ながら調査に協力して下さった多くの方々に御礼申し上げる。ことに上田屋全員調査に際しては，当時の上田屋小学校長熊谷徹哉氏の格段の協力を得た。

---

47 G.Hard,"Zur Mundartgeographie, Ergebniss-e, Methoden, Perspektiven(Düsseldorf, 1966)の第５章SOZIALPSYCHOLOGISCHE RAUM-EINHEITEN参照。邦訳は，日本方言研究会発表原稿集17（1973）所収。

48 馬瀬良雄「言語地理学――歴史・学説・調査法――」(『方言研究のすべて』至文堂1969) のp.197f